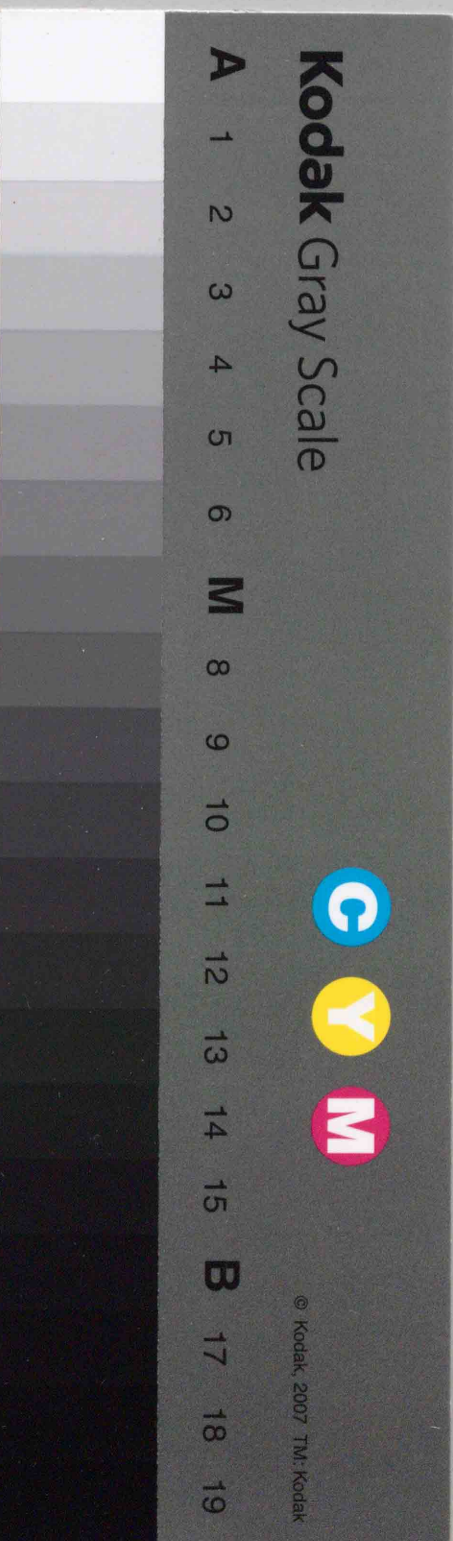
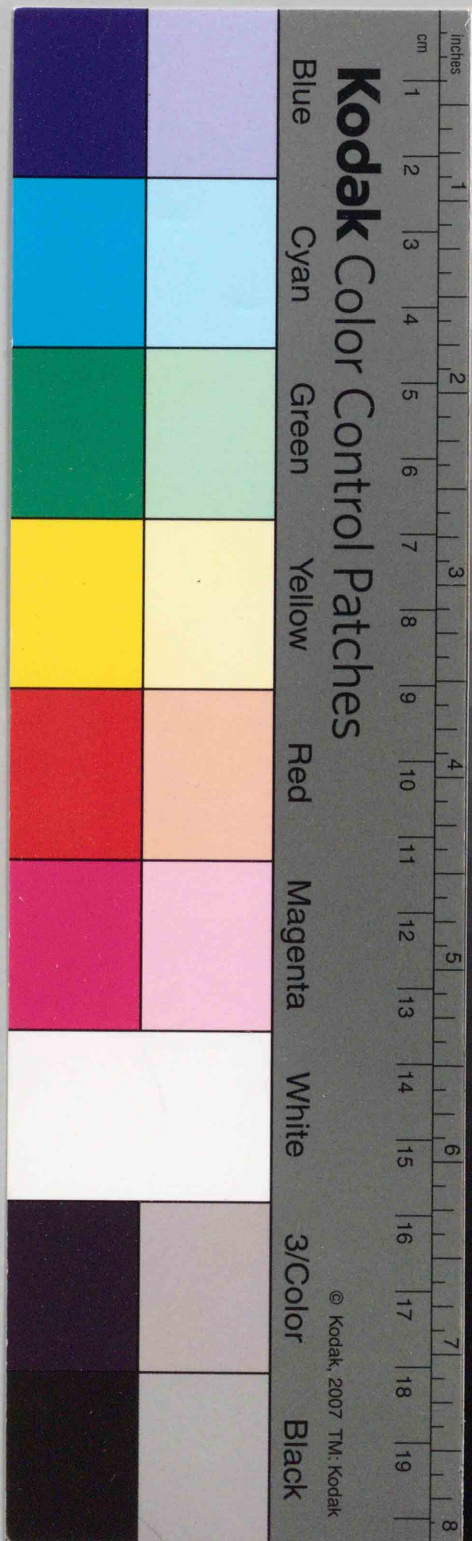


中國文教科書

修正八版

卷一

375.9  
Y019  
資料室



41800

教科書文庫

4
810
41-1912
20000 65220



資料室

修正第八版

文部省檢定濟

大正二十年十二月廿四日 中國國語教科書

3959  
Y019

吉田彌平編

卷一

中國文教科書

東京 光風館藏版



## 例言

- 一本書は中學校の國語科における講讀用教科書に充てんがため、文部省所定の教授要目に準據して編纂せるものなり。
- 一本書の句讀法・送假名法等は主としてその標準を新定の小學讀本に取り、つとめてこれと相聯絡せしめんことを期せり。
- 一本書に採録せる文章は、現代文・口語文・古文・候文及び韻文の四種とす。入就中現代文は每卷常にその要部を占む。而して古文も上級に進むに従ひて適宜これを採録したり。
- 一本書に採録せる文章は務めてその材料を各種の方面に取り、一部份に偏せざらんことを期したり。而して興國進取の

氣象を鼓舞すると共に健全なる思想を養成せんことは編者の特に意を用ひたる所なり。

一 地圖・繪畫等本文の理會を助くるに必要なものは務めてこれを挿入したり。その肖像・筆蹟等を挿入せるは以て先哲を景仰し前賢に私淑する所あらしめんがためなり。

一 諸家の文自から諸家の法度あり。されどこれを教科書に採録するに當りては勢多少の修正を加へてその體例を一にせざるを得ざりき。これ編者の深く諸家に謝する所なり。

大正元年十月

中國國文教科書卷一

目次

一	天皇陛下の御事ども	.....	一頁
二	櫻花(口語文)	.....	五
三	千里の春その一	.....	一〇
四	千里の春その二	.....	一三
五	入學の後兩親に(候文)	.....	一九
六	學の海(新體詩)	.....	三
七	捕鯨記その一(口語文)	.....	三
八	捕鯨記その二(口語文)	.....	三〇

九	武士の魂	柳澤淇園	四五
一〇	笑話二則		
	堪忍	篠崎東海	四七
	識見		
一一	東京		四九
一二	雨の櫻川	徳富蘆花	五五
一三	艦上の威仁親王殿下		五九
一四	佐久間艇長		六三
一五	空中飛行器		六九
一六	須磨	新保磐次	七六
一七	須磨明石(今様歌)		八四

今様歌  
七五/句ヲ  
四回ナラハたテ

いろは歌  
初メ作ル

新體詩  
七五調  
由來一明治  
ナリテ作ラレタ  
イアル  
著名詩人  
本一名(天地有情)  
時元(野)

一八	知己	坪内逍遙	八五
一九	ピラミッド		八八
二〇	螢の話(口語文)	渡瀬庄三郎	九三
二一	自然の音楽	坪内逍遙	九六
二二	太白山の激戦(口語文)		一〇〇
二三	花は櫻木(俚諺)		一〇八
二四	夏の興	徳富蘆花	一一八
二五	游泳場より友に(候文)		一二二
二六	大海原(新體詩)	坪内逍遙	一二三
二七	フレデリキ大王と新兵(口語文)		一二六
二八	幼時の二宮尊徳その一	幸田露伴	一三三

島村藤村  
藤村詩集

次  
小説二部  
世に著はる

二九 幼時の二宮尊徳その二……………幸田露伴 二六

三〇 田園日記………………………… 一三〇

三一 門出(口語文)…………………………長谷川四迷 一三四

三二 亞爾泰山巔に名を題す……………西村天囚 一四〇

三三 秋分…………………………德富蘆花 一四三

三四 蒔かぬ種は生えぬ………………………… 一四五

三五 スバルタ武士………………………… 一五三

三六 戦地より歸りて(候文)……………志賀重昂 一五九

三七 父の訓(口語文)…………………………桂 太郎 一六三

三八 明治聖代の進歩………………………… 一七〇

中國文教科書卷一

一 天皇陛下の御事ども

天皇陛下、御名は嘉仁<sup>ヨシヒト</sup>、明宮と稱し奉り、明治天皇第三の皇子におはします。明治十二年八月三十一日御降誕あらせられ、同じき二十年八月三十一日儲君に御治定、同じき二十二年十一月三日、御年十一にて皇太子に立たせ給ふ。同じき四十五年七月三十日、明治天皇の崩御せさせ給ふや、直に踐阼の式を擧げさ

即位

せ給ひて萬世一系の皇位を繼がせられ、元を大正と  
 改めさせ給へり。  
 陛下聰明にして英毅、夙に仁慈の御徳に富ませられ、  
 龍鳳の資を具へさせたまへり。儲位に在らせたま  
 ひしこと實に二十四年、其の間常に侍講等を集へて  
 諸般の學術と治國の要道とを究めさせたまひ、又し  
 ばしば各地に行啓して具に民の疾苦を問はせたま  
 へり。

行啓 行幸

明治四十五年七月、父皇明治天皇の重き御病に罹ら  
 せ給ふや、深く大御心を惱ましめ給ひ、終夜睫を交へ



天皇陛下の御事ども

給はずして親ら湯藥に侍らせ給ひしこと連日、其の登遐あらせ給ひし後も、朝に夕に、殯宮に奉仕せさせ給ふこと生に事へさせ給ふに異ならず、大喪儀に當りては、玉歩を宮城正門前に移して親しく靈輦を見送らせ給ひ、更に青山なる葬場殿に臨ましめ給ひて、御親祭の式を擧げさせられ、以て孝敬の範を萬民に垂れさせ給へり。わけて大喪儀の當日、恩赦に關する詔敕を下させ給ひて、恩を刑餘の民に頒たせ給ひ、且、内帑の金幣一百万圓を賜ひて、窮民賑恤の資に充てしめ給へるが如きは、我等臣民の感泣に堪へざる

幣一弊

所なり。

我等はかくも仁孝英毅にまします聖天子を戴き奉るを以て中心の光榮とし、既往に於て明治天皇に捧げ奉りし滿腔の忠誠を移して、之を今上天皇陛下に捧げ奉り、以て大いに大正の大御代に貢獻せんことを期せざるべからず。これ實に我等臣民が畏くも明治天皇の英靈を慰め奉り、且天皇陛下の勅旨に副ひ奉る所以の道なり。

捧一棒

二 櫻花

芳賀 矢一



亂 亂

我が日本人の國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻花の山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は日本固有の美景である。

支那の國花は牡丹である。濃豔な牡丹は美しいには相違ないが、あつさりとした日本趣味には合しない。香氣鼻を衝く薔薇は歐米人の花の王と稱するもので、其の色も棄て難く美しいものであるが、これも豔治の態があつて、清楚人を動かす趣に乏しい。日本の櫻は其の色は極めてあつさりとして居る。

治 治

著 著

併し純白ではない、所謂櫻色である。其の瓣は極めて薄い。一樹に無數の花を著けて、咲く時は一時に爛漫と残りなく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚々たる野情もそはつて居る。空青く、水清い日本の風土には最もよく釣合つて、深山都市どこにあつても皆宜しい。二十日草の長い盛りもなく、薔薇の高い香氣もないが、時ならぬ雪と降つては一段の風趣、再び世界を花の中に包んでしまふのである。日本の花の中の花は櫻である。春の日本は水蒸氣が

末 未

照りもせず  
曇りもはて  
ぬ春の夜の  
朧月夜にし  
くものぞな  
さ。

多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日  
和を花曇といふ。夜は照りもせず曇りもせぬ朧月  
夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。  
「そよ／＼と面を吹くや春の風」春の特色はどこま  
でも駘蕩といふ點にあり、温和な所にあり、峻嚴猛烈  
といふ心の微塵もない所にある。櫻は此の時候に  
孕まれて咲く花である。際立つた特色のない所が  
即ち其の特色である。

吉野山霞の奥は知らねども、

見ゆるかぎりには櫻なりけり。

これは満山花に包まれた吉野山の景色、

花の雲、鐘は上野か浅草か。

これは花に掩はれた大都會の花曇の日の光景であ  
る。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を賞翫する花で  
はなく、樹として賞翫する花である、否多くの樹を  
植ゑつらねてその中に立つて賞翫する花である。  
上から見て愛でる花ではなくて、下から眺めて愛で  
る花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の  
人となるのである。(月雪花)

翫||玩

閉閣

視見

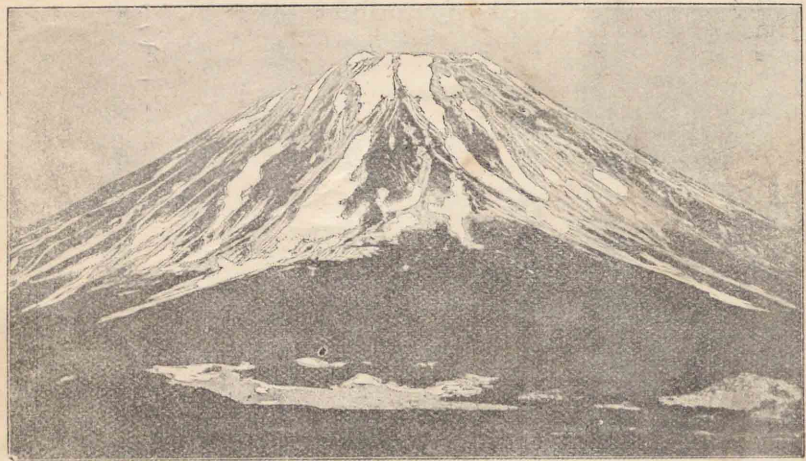
三 千里の春 その一

大和田建樹

山青く浦霞む。千里みな春なり。此の間に一線を  
 曳くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道  
 を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙  
 とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑、畫か。  
 七砲臺邊、波穩にして、羣れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに  
 似たり。帆を半ば張りて出てゆく船あり、櫓をあや  
 つりて横ざる舟あり。房總二州の山々は霞に消え  
 て、視れども見えぬ。  
 松青きところ、桃の花紅なり。藤澤の野、山北の谷、人

煙 烟

杳 杳



富士山

ごとに唯美しと呼ぶ。  
 三保の松原煙り渡りて、春  
 は畫の如し。磯に碎けて  
 折れ返る波、波路の末に浮  
 き立つ雲、何物か造化の妙  
 筆に漏れん。近き舟は行  
 けども、遠き帆影は動かん  
 ともせず。杳としてほの  
 見ゆるは伊豆なるべし。  
 富士は水彩もてつくれる

遺一遺

○畫の如く、窗の右に立ち、又左にあらはる。  
 三尾の平原、麥は綠に、菜種は黃なり。熱田の社を左  
ミカオリに見て、春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ  
 影を見せたり。田夫は金の鯨を背にして妻と語り、  
 行商は旅宿の可否を評して我が好む方へと人を勸  
コソウむ。  
 彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、  
ヒラネ京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡はいづれの處  
九車ぞ。問へども答へず。霞にたゞまるゝ遠近の山影、  
ニホ或は淡く、或は濃く、鳩の浦風、波に眠りて、粟津の松原

ひとり昔を語り顔なり。(雪月花)

エ中ノ歌

四 千里の春 その二

大和田建樹

東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我を迎へて  
 歌ふ。最愛の母にあひなつかしき父と語るに似た  
 るは、いつも京都に著きたるときに心地なり。  
 山紫に、水明かなるところ、たゞ夢のごとく、現のごと  
 く、三條をわたり、四條をわたること、日に幾度ぞ。  
シバ躑を柴に折り添へて、戴き連れたる大原女も、いつし  
 か我が友となれり。如意嶽より吹き來る春風は輕

柴一芝

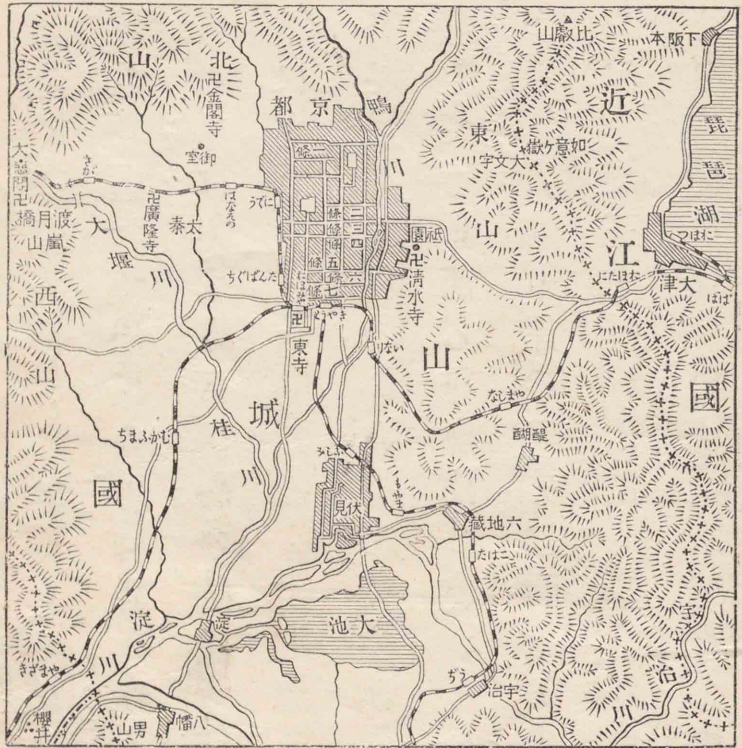
隄

く我が袖をはらひて行くへは遙かに隄の柳の系にあり。

餅

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客、けふも清水観音堂の前をみたしぬ。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一幅の四條畫なるに、姥は此の間に立ちて「蕨餅めせ」と呼ぶ。しばし息みて、眺めわたせば、淺黄に、藍に霞み渡れる八幡山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。燈火の影は水に映りて、星の如く、花の如し。祇園の

枝



を勧むる聲、この花の前後に山彦を反し來る。

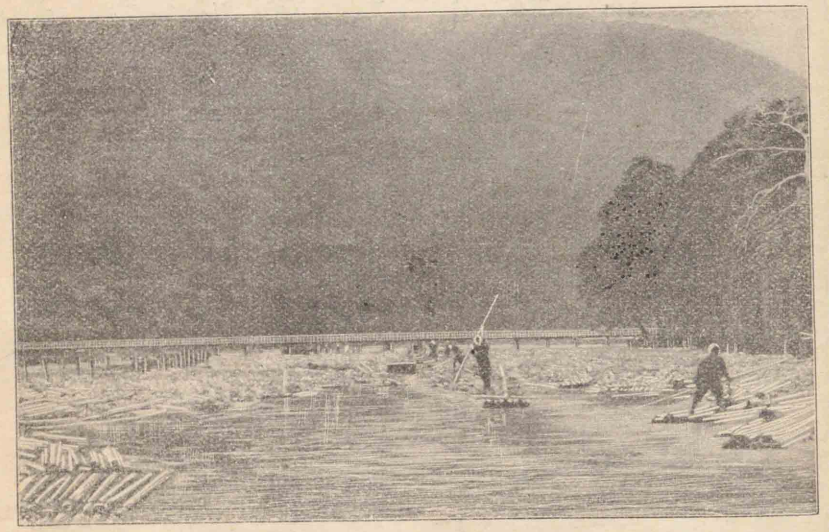
夜櫻看んとする  
人は神山へと向  
ふ。一本の老木  
は枝を垂れて、篝  
火の焰に護られ、  
寒からぬ雪は雲  
なき空よりこぼ  
れて顔を打つ。  
田樂を賣る聲、茶

梢一稍

西山の花看る人は、多くまづ御室を指す。松緑に、樓門赤く、茶煙たえぐくに颺りて、花きはめて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。

かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點綴して咲き誇る花、嵐山の春こそ今酣なれ。小舟漕ぎゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。水清く巖を洗ひて玉と碎け、山白く煙を離れて空にかよふところ、此の美は彼の美と相映じて自然の彩色をな

阪二坂



す。阪を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、さながら西陣を織り出せるが如く、又友禪を染めなせるが如し。途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春

千里の春もの

橋の紅 渡り橋

姿一恣

ものさびし。茶店あれども、客來らず。少女は落花  
 を風に任せて眠り、兒童は門の仁王に紙礫を打ちつ  
 けて去る。  
 暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうく鴨川に襲  
 ひ來れり。清水の堂も半ば隠れぬ、大文字も姿を隠  
 しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るく色どられゆく山  
 影、淡く、濃く、青く、黒く消え行く人影、いづれ詩中のも  
 のならぬはなし。天地たゞ平和、四圍たゞ寂寞。か  
 へりみすれば西山もなく、北山もあらず。(雪月花)

五 入學の後兩親に

挨一埃

拜啓豫定の通り昨日午後三時頃電車到着仕候  
 叔父様始め皆様少しも御變なぐりませられ候ま  
 御安心遊ばせられ候私には挨拶もそとて學校  
 へうけつて門衛の許を得て校内を見物仕候と  
 明日より五箇年間の我が家かと思ひ候はば何と  
 なくなつてく覺え候てあちこち徘徊仕候  
 ちつら日暮に相成門衛にうながされて校門  
 を出で申候  
 歸宅の後御土産の品を差上候處大層御悦下

叔母—伯母

され候それよりは中學校の話と御地の噂ウソナにて  
 果つても覺えず候商業ひが叔母様の今日につ  
 うれたるに早寐にせよと仰せられ候ヤまが  
 て寢に就き申候  
 ふと目をさまし候へば時計は正に六時を報じ申候  
 直ちに起き上り深呼吸例の如く朝飯をすませ  
 學校に急ぎ候へばヤ己に私より先に三四十名も参  
 り居り候ぞれヤく一様に嬉しげなる顔致  
 居り候が服装のまろくヤなると新入生たること  
 はお分り申候

参—参

己  
己  
己

侍—侍

宣—宣

午後一時九時喇叭を相圖に一回講堂に入り校長及び擔  
 任の先生より入學後の心得につき懇切なる訓諭を  
 うけ申候授業は明日より始り由に御座候一日も早く  
 授業を受けたく明日が待遠く待遠く候  
 私のお部屋は東の六畳にて文雄君と二人机をな  
 らせり候先はもうあらず安着の御知らヤせ  
 此方一同よりも宜しくと申出候不宣ヤ

四月五日

武夫

御両親様



### 六 學の海

學の海に漕ぎ出でて、  
われらは中學一年生。

うれし、うれし、何となく。

ゆくてはいづこ、

いづこかゆくて。

水天一碧、彼岸は遠し。

いでやためさん腕の力。

日本男兒の氣性にて、

なに到られぬ事がある。

彼一渡



風はいかにつよくとも、

波はいかにあらくとも。(中學唱歌)

### 七 捕鯨記 その一

江見水陰

\*明治三十九年。

湍一哩

四月十八日午前九時、余は韓國蔚山に於て、捕鯨汽船  
ニコライ丸に乗り組んだ。やがて拔錨。船は北の  
方鬱陵島を指して進む。これから約百三十哩。

この船はもと露國の捕鯨船であつたが、明治三十七  
八年戦役の初めに、海上の偵察をした爲、我が海軍に  
捕獲されたのである。鋼鐵製。噸數百二十。速力

網一網

八節。見た所は水雷艇とランチとの間の形であるが、誰にも目につくのは舳ヘサキの捕鯨砲である。砲の中に六尺餘の鋼鐵製の銚シが嵌ハマめてある。銚には徑五寸二分からの太綱フツが結び附けてあつて、綱の一端はウインチウイッチに巻かれて三百六十尋クワまでは延ヒキすことが出来る。砲を撃つ、銚が飛び出す。當れば爆發して、鯨の體內で銚の先が錨イカリの如く開く。綱がついて居るので、切れぬかぎりは逃すことはない。鯨が弱つた處で、ウインチで巻き戻すといふ仕掛。この日は夕方まで鯨の影も見えぬ。夜の九時から

潮一汐

は、火を消して機關の運轉をやめ、日本海の暗黒の中に、船はそのまゝ流して、船員一同眠に就いた。「この風、この潮の狂クワふ中に、船を流して置くのか。心細いことだ。」などと考へて居るうちに、いつしか疲れて、余の腦も全く運轉を止めてしまつた。翌日眼の覺めたのが八時頃。船はもう進行して居た。昨夜は十湮流トウリされたとか。忽ち聞く、ボーイの聲。「見えました。」余は夢中で階子ハシを走り上つて甲板バンに出た。見れば、左舷ゲン四五十間の處で、高さ二丈ばかりも潮を

噴吹

噴き上げて居るものがある。其の壯觀。敷設水雷が爆發したかと疑はれるばかり、海水は空高く衝き上つて、それが忽ち散亂するのである。見て居る間に、彼は忽ち背を隠して、海中深く没してしまつた。あとは唯渺漫たる大海原。砲手の諾威人は余のより二倍もある大きな手を砲の把手へ掛けて、上下左右に動かして見て、靜かに機會を待つて居る。

餘余

九時十五分に再び鯨は浮いた。が、餘程遠い。砲手は全速力を傳へた。が、近寄る間には沈んで了つた。

何處へいつたか、分らない。

十時に、また浮んだ。今度はあまり遠くなかつた。

「徐行」暫くにして「最徐行」忍足といふ見え。満船、

咳一つすら遠慮して居るのである。此の靜かさを

破つて、鯨の潮を吹く音ジュン。これが大強音の響

を以て、不意に鳴る。大喝一聲、海の神から叱られた

様な氣がするのである。もう程なく射距離に入る

と見た間に、また沈んで、行方知れず。

船は全速力を以て進航し、鬱陵島より南西二十四五

哩といふ處に達した。忽ち叫ぶ、檣樓の船長。「鯨羣、

鬱鬱

鯨羣。」時に午後零時四十分。

果して、前面一哩程の處に鯨艦隊の大運動を見出した。船員の顔は見る間に輝いた。どれから取つてよいか、さすが迷ふであらう。と見れば、砲手は平然として居る。

巨鯨

一時十分、鼻の先に一頭の巨鯨が浮んで、檣より高いかと疑はれる程、海水を噴き上げた。今こそ時である。砲手は少しも狼狽せず、<sup>ストップ</sup>停止を傳へた。船は惰力<sup>ダ</sup>で進む。

潜潜

知るや、知らずや、巨鯨は一寸潜つては浮き、潮を噴い

裏裡

ては潜り、今三回目を潜つて浮ばうとする一刹那、此處ぞとばかり、かの砲手は引金に指を掛けた。轟然一發。忽ち砲手は白煙の間に隠れ、巨鯨は白浪の裏に没して、船も無し、海も無し。

此の時、檣上に聲あり、無効。これは船長の報告である。白い煙が消えると、平然たる砲手の顔が、再び眼にうつる。

準準

此の時、既に船長は檣の上から飛鳥の如く降りて来て、第二の銚を仕込むべき命令を傳へた。準備は出來た。けれども、さきの砲聲で、鯨は逃げ去

つたであらうと心配して向ふを見ると、どうしてど  
うして鯨の羣は平氣で以て、彼方にも此方にも泳い  
で居る。これは今餌について居るので、氣がつかぬ  
のだといふ。どうしても鯨には大きい處がある。

(捕鯨船に據る)

八 捕鯨記 その二

一時四十五分となつた。多くの中で、一番運の悪い  
のが、舳シマキの前面十二三間少し左寄にぼつかり浮いて、  
極めて暢氣インキに潮を噴き上げた。

些サリ  
少シ  
シ  
シ

聲  
||  
声

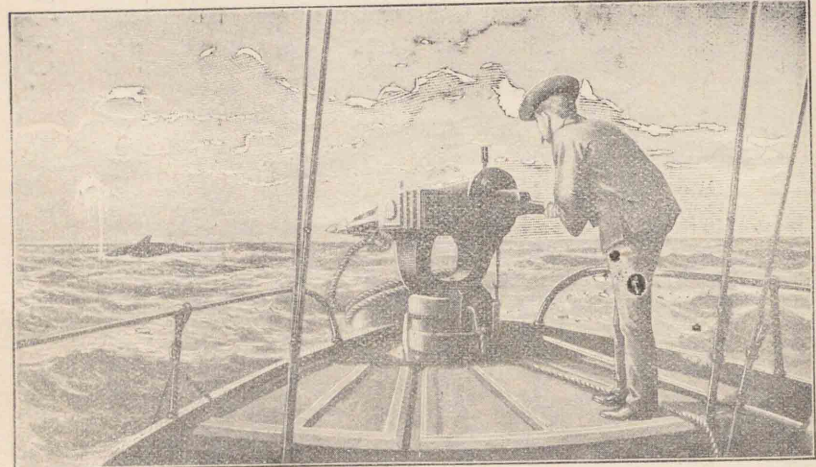
轟然一發。白煙。白波。海底に第二の爆發。これ  
は鯨の體に突き入つた銛シヤク穎シヤクの破裂した響ださうな。  
船長は大聲に「オール、ライト」。船員は齊しく叫んだ。  
「オール、ライト」「オール、ライト」。砲手は此の一發の命  
中に於て、多大の名譽を荷シヤへるにも關らず、顔面に些サ  
の表情を示さず、例の如く悠然イウゼンとして砲の傍に立つ  
て居る。  
ユウクリトオケツイニ居ル

余はいつの間にか唯一人、船橋フナハシの上に残された。水  
夫長も水夫も皆下に降りて了つたのである。「萬歳」  
萬歳。と余は絶叫ボウケツしたが、誰も應じない。下ではそれ

繰操

所ではないのであつた。  
 ウィンチの回轉は風車の如くである。銆網は水の  
 逆<sup>ノドバシ</sup>る如くに繰り出されて居る。摩擦の爲に熱する  
 車輪へ水を掛ける。機械の要所々々へ油をさす。  
 船庫に飛び降りて繰り出された綱の捌<sup>サバ</sup>をつける。  
 檣から吊り下げた滑車から鋼鐵索を下す準備をす  
 る。更に又第三の銆を仕込むべく迅速に支度<sup>オシタケ</sup>をす  
 る。これが皆同時である。  
 が、さて肝腎の鯨はと見ると、何處にも見えぬ。しか  
 し銆網はぐんぐん海中に沈んでいく。何だか甚だ

汗汗汚



捕鯨船

心細くなつた。そこへ汗  
 だらけになつた機關長が  
 登つて来て、「御覽なさい、い  
 まは後<sup>オシタケ</sup>へを掛けて居るの  
 です。それに、徐行<sup>スロウ</sup>位の速  
 力で、船は出て居ます。」と教  
 へてくれた。百二十噸の  
 汽船は今や一頭の鯨を綱  
 引に傭<sup>ヤト</sup>つて、石炭を焚かず  
 に海洋を走つて居るので

鈍純

ある。

二時ごろ遙かに遠く手負鯨は浮き上つて、それでも高く海水を噴き上げた。船を引く力は少しも鈍らぬ。「今、銚綱は二百七十尋ばかり出て居ます。まだ九十尋は餘つて居ます。なに、其の内にはもう弱りますよ。」と機關長は平氣。「すると、もうこれで一段落ですか。」と余は問うた。「や、どうして〜。これからが大活動です。」と云ひ捨て、馳せ降つた。

此の時、事新しく驚かれたのは、海原の廣大なることである。巨鯨は紙鳶カキの如く小さく、銚綱はタコイト鼠絲ネズミイトの如く細く見えるのである。

二時十分、今まで鯨に引かれて居たニコライ丸は、愈

愈儉

反對に鯨を引き寄せ、段となつた。引き始められてからは、鯨の浮き沈みが急激になつて、二分時、三分時毎に海水を吐くのである。それが近寄るに従つて益々繁ヒラヒラく、後には潮と共に傷口から血を噴くのとさへよく見える。銚の打ち込まれて居る處は、人間ならば腰といふ邊である。背部の疣ウツの左方である。其所から五六尺も高く血を噴き上げながら、未だ死に切らぬ鯨の喘アハぎ。物がかう偉大であると、悲惨とい

冒<sub>二</sub>冒

ふ念は起りにくい。これをも壯觀の内に數へたく  
なる。  
とゞめの銛を撃ち込む時は來た。二時四十五分に  
又彼の砲で撃つた。が當らなかつた。三時十分の  
頃には、血だらけの海波がそろく荒立つて來た。  
風が出たのである。三時二十分再びとゞめの銛を  
撃つた。今度は當つたけれども、鯨はまだ死なぬ。  
そこで愈捕鯨事業中の大冒險たる端艇突撃の令は  
下された。  
左舷に吊つてある二閒未滿の小端艇は忽ちにして

槍<sub>二</sub>鎗

\*  
韓國慶尙南  
道にあり。

下された。この勇敢なる乗組はと見ると、二水夫と  
船長である。船長は手に槍のごとく見える四閒餘  
の突銛を持つて、端艇の艦トモに突つ立つて居るのであ  
る。蔚山の急カサを聞いて、これに走るべく、船頭に槍を  
杖づいて立ち上つた鬼將軍オニの雄姿、それを洋式で見  
せて居るのである。余は帽を無闇ムカシに振つて、萬歳マンサイを  
絶叫した。  
勇敢なる端艇は見るく海中の噴火山に突進した。  
血煙は日光に反射して火山の焰に異ならぬのであ  
る。忽ちにして端艇は鎔岩流とも見るべき巨鯨の



危一厄

胴中に乗り揚げて、船體は一本立となり、人は皆逆様になつた。見る者は、皆冷汗をかいたのである。「あつ、あつ」と云ふ聲がそこにもこゝにも響き立つた。沈著なる砲手までが、此の時ばかりは救命浮標に手を掛けようとして居る。實に此の端艇突撃位、危険な事業はないのであつて、若し鯨の尾羽か手平かに觸れようものなら、それが最後、船體は粉碎されて了ふのである。乗組は無論跳ね飛ばされて、助つた處で一生の不具者。

唯見る、艦の船長、力と頼む一本の突鉞を扱いて、鯨の

權一擡

心臓部目懸けて突つ込んだ。これと同時に鯨の體は海中に沈み入つて、絶大なる血の渦卷。端艇は山頂から谷底へ落下したやうに吸ひ込まれた。

二水夫は必死となつて、權を動かしたが、船長は未だ突鉞を放さぬ。筏師が竿を泥川に突つ立てたやうな形で、一生懸命に力を入れて居る間に、急にそれを引き抜くや否や、それつとばかり五六間後退を命じた。

退くか退かぬ間に、鯨は礁脈の如く又浮き上つた。それと見るや、奮然端艇を再び乗り揚げて突く。沈

闘闘

む。退く。浮く。突く。四回ばかり繰返された間に、六尺餘の銛の穂先柄の部は三閒位は弓の様に曲つて了つたのである。豫て用意の鐵槌で、退いては打ち直し、打ち返しては又突く。此の間の惡戰苦闘實際の戰爭にもこれ程の事は稀であらう。其の間に、船長は「えつ、面倒なり。」と思つたか、曲つた穂先を舷側に打ち附けて、反を返し、今しも浮き上つたる鯨の手平の上を深く突き刺したので、さしもの大動物も全く絶命。兩方の手平を高く立て、雪の如き眞白い腹を出して、碧海に一

唱稱

文字。「萬歲」は始めて船員の口に唱へられた。時に午後三時四十一分。發砲してから此の最後まで、實に一時間と五十四分を費したのである。

測側

それから其の鯨をウインチで引き寄せて、右舷側に鐵鎖で結び附けた。大方ニコライ丸の八九分まであつた。身長を測つて見ると、六十一尺、胴の周圍の最廣部が二十四尺。長鬚鯨の雄であるといふことだ。(捕鯨船に據る)

有止齒類ノ一種アリ

### 九 武士の魂

閣一閣

豊太閤、晩年茶道を好み、屢諸將を會して茶式を演じ給ふ。加藤清正之を憂へ、茶道はもと逸人隱士纔に其の日を消するが爲の末技にて、武事に益なく、且人をして文弱に流れしむる害あり、國家を治むる者の修すべき道にあらずとして、諫言再三に及びしかど、太閤用ひ給はず。この上は利休を殺して禍根を斷つの外なしと決心し、伴りて利休の門に入り、茶技を學ばんことを乞ふ。利休喜んで之を諾し、やがて茶室に請じ入るゝに、清正脇差を携へて室に入らんとす。利休止めて、茶道の式、室外に於て之を解くもの

盾一楯

なるよしをいふに、清正儼然としていひけるは、茶の式はさもこそあらめ、刀劔は武士の魂なり、清正に於ては、茶室にまれ、他所にまれ、武士の魂は瞬間も身を放ち難し。といひければ、利休笑ひて、さらばさても候ふべし。とて許しぬ。清正は隙を窺ひて刺し殺さんと、利休が式を行ふ手前を目も放たず守り居たり。利休從容として式を舉ぐる程に、釜をあぐれば釜盾となり、火箸を執れば火箸盾となりて、打ち込むべき隙とはなし。少し心に異む折から、利休は、やをら釜を執りて之をかく

灰—炭

るよと見る程に、忽ち爐中に覆しければ、灰はぱつと立ちて、室内に充ち、目・口・鼻孔に入るに、清正覺えず障子蹴放ち、前庭に飛び下りたり。

その時利休は清正の遺れし脇差を取り、徐かに清正を呼びて、加藤殿、武士の魂はいかにせられしぞ。斯くても尚利休を覘ひ給ふか。利休の命をまゐらせんことはいと易くこそ。といふ。清正大いに愧ぢ、茶道の自ら心膽を練りて機を察するに敏ならしむるものあるを知り、終に意を傾けて利休に師事し、その技を修行せりとぞ。(不盡廼屋遺稿)

師—帥

中村 紘 春の三子

一〇 笑話二則

堪忍

柳澤 淇園

或人、文盲なる者を意見して、世の交は他の事はいらず、唯堪忍の二字をよく守るべし。といふ。文盲の人は首を傾け、かんにんとは四字にて侍らずや。と指にて數へ、御許には思し違へなるべし。かんにんの四字にて侍り。といふ。意見せる人、愚昧の人かな。堪忍とは、たへしのおと書きて二字なり。といへば、また首を傾け、たへしのおならは、又一字ふえたり。五字と

味—味

蟲二虫

なりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し侍るなり」といふ。かの意見せる人またいふ、汝が如き愚昧の者は實に諭し難し。人に似て蟲同様なり。己が儘にすべし」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰あるべし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、惡にせられても少しも腹立ち侍らざるなり」とて笑ひ居たりきとぞ。

其の知には及ぶべく、其の愚には及ぶべからず。

(たはれ草)

識見

篠崎 東海

畫二畫一画

來二末

人は賢不肖とも自己の識見はありたきものなり。昔或なま好事のものありき。或時鼠を防がんために猫を飼ひぬ。毛色黄ばみ形大きくしてたけぐしく、さながら畫がける虎に似たれば、とらと名づけて寵愛せり。友人來りて其の故を問ふ。答ふるにその意を以てす。其の人のいへるやう、それはまだ至らぬ沙汰なり。虎より強きものあり、世に龍虎といへれば、龍こそまされ」といふ。「さらばその意に隨はん」とて、龍と名づけぬ。然るに、又さる人の來りて、

叶ト叫

「それも至らぬなり。龍を載せて空を走るは雲なり。」  
 といへば、また、雲を吹き散らすは風なり、風こそよか  
 らぬ」といふ人のありけるまゝに、風と名づけ置きた  
 るに、また人ありて、「風何ほど烈しくとも、吹き破るこ  
 との叶はぬは壁ならん」といへば、いよくト惑トひて、い  
 かゞ名づけてよからん」と、あたりの人に問ひければ、  
 「壁も呼びにくからん。壁に穴を穿つものは鼠なり。  
 それを捕ふるものは猫ならん」といはれて、はじめて  
 心づきたりといふ。これ、おのれ識見なきが故に、こ  
 こに問ひ、かしこに尋ねて、いよく迷へるなり。あ

迷ト惑ト

まりの好事は益なきものなるべし。

(問はず語り)

一一 東京

武藏野は月の入るまき山もなし  
草より出て、草にこそ入れ

月影の草より出でて草に入るといはれし武藏野も  
 三百餘年の昔、江戸幕府のこゝに置かれてよりは、豊  
 より出でて豊に入る月を眺むるやうになりぬ。明  
 治天皇都をこゝに奠め給ひて東京と呼ぶること  
 となりて四十餘年、家居はいやましに榮えて民草日  
 毎に繁りゆき、戸數四十六萬、人口百八十萬、市街の規

恥

模町のにぎはひ、實に東洋第一の大都會たるに恥ぢざるに至れり。

宮城は市の中央高臺にあり。もと江戸城の西丸なりし處をトして御造營あり、明治十七年起工して二十一年に落成す。建物の坪數二萬餘坪ありといふ。四邊周らすに濠を以てし、濠の上には老松枝を交へて千代の縁を濠の水に涵せり。正門の邊、二重橋の前に至れば、九重の奥深く玉の叢を拜すべし。吹上御苑は面積十三萬坪、林泉殊に幽邃なりといふ。東京の地、西南は丘隴相連れども、東北は槩ね平坦なり。

西南の臺地を山手といひ、東北の平地を下町といふ。麴町麻布・赤阪・四谷・牛込・小石川・本郷は山手に屬し、神田・日本橋・京橋・下谷・淺草等は下町に屬せり。大なる商店・工場は大抵下町にあり、學校貴紳の邸宅等は山手に多し。

市街は四通八達にして大路小路縦横交錯す。但俗に「京都は碁盤割、江戸は阿彌陀割」といへど、地圖を繙いて之を見れば、その錯雜なること、阿彌陀割よりもなほ甚だし。従つてその通りも多くは迂回して北し、西し、或は東し、南す。されば都人はその道筋をい

回々

裁裁

ふに東西の語を用ひず、常に左右の語を以て之を辨  
ず。近年市區を改正し、車道、人道を區別し、中央に軌  
道を設けて電車を通じ、兩側に電信線、電話線を架し、  
地下に水道、瓦斯管を設くるなど、市の體裁は殆ど一  
新せり。

公園の中、最も廣闊なるは上野公園にして、之に次ぐ  
は芝公園なり。前者は寛永寺、後者は増上寺の在る  
處にして、徳川氏の靈廟今に現存す。

上野公園は不忍池を擁して風景絶佳、春時の櫻花最  
も世に著る。博物館、動物園またこの域内にあり。

共進會、美術會、園藝會を始め各種の展覽會、こもぐ  
こゝに開かれ、四時遊觀の客絶ゆることなし。

芝公園は増上寺の山門の邊、青松多く、朱門翠蓋相映  
じ、頗る幽靜なり。その丸山に上れば、眼下に東京灣  
を望み、碧波浩蕩の中に風帆の隱見するさま、自ら胸  
襟を闊うす。

淺草公園は觀音堂の在る處なり。殿宇壯麗、丹碧相  
輝けり。賽人絡繹として跡を絶たず。仁王門より  
雷門の址に至るまで、仲見世と稱へて、小店道を挾ん  
で軒を列ね、多く玩具、繪草紙の類を商ふ。參詣の者

址址



場場

多くこゝに手土産を求む。殊に雜選なり。日比谷公園は市の中心たる丸之内にあり。その地宮城に近く、洋風の公園なり。園内に四季の花弁を培養して人目を喜ばしめ、又運動場ありて、市民の自由を使用するを許す。

凡そ首府の發達は常にその國の發達に伴ふ。日本帝國の隆昌益その度を高むるにつれ、東京市の發展また將に底止する所を知らざらんとす。武藏野の末なりし昔を想へば誰か今昔の感なからん。

(東京風俗志に據る)  
平出 輕次郎

一二 雨の櫻川

徳富蘆花

明治三十一年四月二日

一名筑波川、常陸の名所なり。

水國の春を見んとて家を出て、土浦にて汽車を下りしは午後四時過ぎなり。陰雲筑波山を籠めて、今にも降り出でんとす。宿は定めたれど、暮るゝに少し間もあれば、出でて櫻川のほとりを逍遙す。霞が浦は見えねど、水田の末に白帆の移り行くが見えたり。川に沿うて四手網多くかゝれり。小屋はみな水に柱して立ち、岸より一枚板を渡して橋とし、漁人は小屋に居ながら網を捲き上ぐ。とある小屋

座一坐

に入りて漁翁とさまぐの物語す。小屋の中は半  
 疊敷ほどなり。席の上に座蒲團を敷き、右手の棚に  
 辨當箱、角燈、酒德利、座右に煙草盆、茶瓶、小さき火鉢を  
 置けり。マッチ箱に入りたるやうなり。十分おき  
 位に漁翁、轆轤の柄を握りてきりく、巻き始むれば、  
 斜に十字形をなせる四手の竹、水中より浮き出でて、  
 やがて網見え、やがて四十度の勾配に起き上り、網の  
 口より水たらくと玉をちらし、銀色の魚鰓ほろほ  
 ろまろびて網の底に集る。漁翁乃ち座の左にかけ  
 し長柄のさでもてすくひあげて、生簀の籃に投ず。

集一椎

鳥一鳥

鮒たなご、三四百目のさいなどありき。  
 小屋を出づれば、黄昏近き空どんより暗くなりて、小  
 雨ほとく、落ち來たり。櫻川の水さながら、膏のや  
 うに淀みて、岸の柳の影もおぼろになりぬ。傘をか  
 ざして隄に立てば、暮雨煙の如く、寸碧の山、小さき四  
 手網、そこゝに見ゆる薺ほどなる獨樹、皆融けて消  
 えなんとす。夕鳥の聲だにせず。傘一つ向ふの田  
 の中を行く。  
 宿に歸りて春雨のしめやかなるを聞きつゝ、読みさ  
 しの詩集、繙くほどに、いつしか眠に落ちぬ。(青蘆集)

一三 艦上の威仁親王殿下

明治十二年の末、威仁親王殿下は實地御練習の爲、海軍少尉補の御資格にて、英國支那艦隊の旗艦アイヨンドュークに乗り組ませ給ふ。是實に皇族の御身にて外國軍艦に召して、親しく御修業遊ばさるゝことの嚆矢なり。名にし負ふ海軍國の艦隊なれば、規律の嚴肅なることもいふばかりなかりき。或時アイヨンドュークは他艦と共に香港に碇泊せり。たま〜同港に寄泊せる我が官人某氏、久々に

召一占

端一瑞

て殿下の尊容を拜せばやと、急ぎ端舟に乗り、雨を冒して同艦に到り、來意を告ぐれば、艦長クリーブランド大佐は快く某氏を迎へて、殿下は唯今御勤務中なれば、しばし待たるべし。若し又艦内一覽の御望もあらば、案内致させんと言ふ。某氏其の好意を謝し、一將校に案内せられて艦内其處此處と巡覽し、遂に上甲板に出でたり。折しも風さへ加りて猛雨斜に飛ぶ中に、全身しとゞに濡れながら、ずぼん高くまくりて、白々と素足を現し、嚴かに雨中に直立せるものあり。雨衣の頭巾目

始—殆

深なれば、面貌は見えざれども、副直勤務中の少年士官とは手にしたる望遠鏡にても知られたり。案内の將校そと某氏に語りて、「風雨にさらされつゝ、職務を執る彼の少年士官こそ殿下にましますなれ。」といふ。某氏は打驚き、餘りの御痛はしさに、思はず走り寄りて、「殿下、殿下。」と申し上げしに、殿下は端然直立せられたるまゝ、一言の御答もなし。某氏も始めて御勤務中の御身に對して言葉を掛け奉りし輕忽ケイコツのふるまひを悟り、恐懼オソレおく所を知らず、一禮して艦長室に歸り、交代の時の到るを待てり。其の間某氏は萬

感—惑

感胸にせまりて、落つる涙を止めあへざりき。程もあらせず、殿下は司令長官クート中將と共に艦長室に入らせ給ふ。某氏の殿下に對する御挨拶終るや、中將やがて某氏に向ひて、「貴下は今雨中に立てる最も尊敬すべき貴紳を見給ひしならん。貴下の感想如何を知らず。唯願オノケはくは、余を以て貴紳を待つマツの禮を知らざるものとなすことなかれ。余が殿下を他の將校と同視して、時に或は常人すら難カタしとする職務に服せしめ奉る所以は、殿下をして將來有爲の武將たらしめ奉らんが爲のみ。余は殿下の教

譽

導を委任せられたる英國の名譽の爲、あくまで其の成功を期し奉らざるべからず。而して余の最も感喜にたへざるは、殿下が學術に勝れ給ふのみならず、如何に困難なる職務を執らせ給ふ際にも、つゆいとほせ給ふ御氣色なきことにして、余は殿下の例を引きて部下を訓誡するを常とせり。

某氏は今更に英國海軍の規律の嚴肅なると殿下の御職務に御勵精なるとに感じ入り、深く司令長官以下の好意を謝し、殿下に御暇乞申し上げ、名殘惜しげにアイヨンデュークを辭せり。(高等小學讀本)

一四 佐久間艇長

豫

明治四十三年四月十五日、我が海軍第六號潜水艇は他の僚艇と共に水雷母艦歴山丸に従ひて吳軍港を發し、廣島灣を横斷して周防國岩國の海上約一里の點に到着し、各種の演習に従事せしが、俄然その行方を失ひ、豫定の浮遊時間を経過すれども其の姿を海上に現さざりき。

母艦及び僚艇の乗組員は大いに驚き、直ちに近海の搜索を始むると共に急を吳鎮守府に通じければ、鎮

平岡定一

守府は即時軍艦豊橋に救助の命を發したり。より  
て平岡同艦長は急ぎ出港の準備を整へ、搜索竝に引  
揚に要する探海用具、起重機等を積み込みて遭難地  
に急行せり。

かくて、翌十六日午後に至り、漸く其の沈没の箇所を  
發見せしかば、直ちにこれが引揚に著手し、十七日午  
前七時半その作業を終へ、艇内の排水と換氣とを行  
ひ、艦内に入りて之を検するに、潜水後既に數十時間  
を經過せることゝて、艇長佐久間大尉は腕を拱きた  
るまゝ、端坐して絶息し、部下の乗組員長谷川中尉原

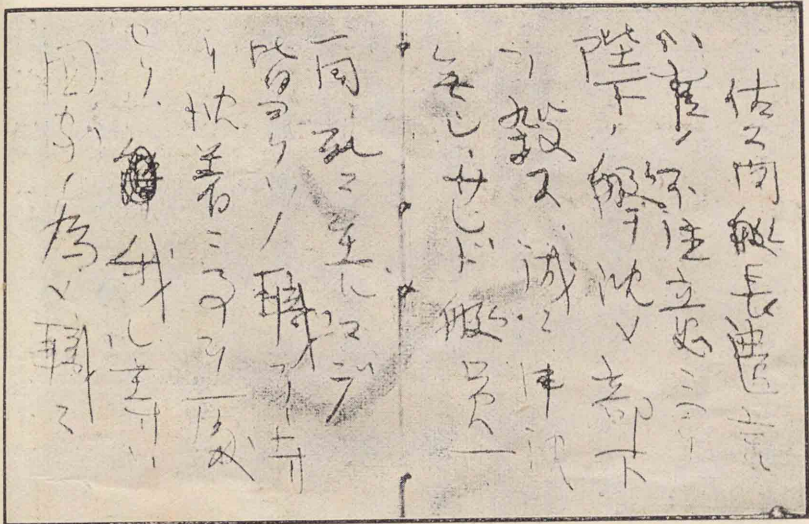
名は勉。

山機關中尉以下十一名の勇士、いづれも或は仰臥し、  
或は安座せるまゝ、艇とその運命を共にし、頗る悲壯  
なる光景を呈したり。

大尉は若狭の人、沈勇を以て知らる。此の異常の變  
に遭ひて毫も狼狽せる様なく、部下を指揮してあら  
ゆる應急の手段を講じ、且自ら筆を執り、呼吸の困難  
を忍びつゝ、泰然として沈没當時の状況を詳記し、こ  
れを艇内に遺せり。この記録は實に艇の沈没後午  
前十一時より午後零時四十分の間に認めたるもの  
にして、言々句々至誠より迸り出でたる血涙にあら

且一且

槩



佐久間艇長遺書

ざるはなし。今左にこの  
 槩要を記せん。  
 大尉は先づ自ら責を引き  
 て、  
 小官の不注意によりて  
 陛下の艇を沈め、部下を  
 殺す、誠に申譯なし。  
 と至尊に謝し奉り、なほ一  
 身の危急を忘れて偏に國  
 家の爲に潜水艇の將來を

訳

憂へ、

されど、艇員一同死に至るまで皆よくその職を守  
 り、沈著に事を處せり。我等は國家の爲職に斃れ  
 たり。毫も憾とする所なし。たゞ憾とする所は  
 今回の事變のために潜水艇に關する研究の挫折  
 せんこと是なり。願はくは諸君益、勉勵して潜水  
 艇の發展に全力を盡されんことを。  
 と述べ、更に沈没の原因及び其の經過を記したる後、  
 自家平生の覺悟に言及して、  
 余は家を出づるとき常に死を決せり。

憾—怨

窮窮

と敍し、更に至尊に對し奉りて、

小官は謹んで陛下に白す。仰ぎ願はくは最も忠

實に職務に殉じたる小官部下の遺族をして衣食

に窮するなからしめ給はんことを。我が念頭に

懸るは唯これのみ。

と歎願し、最後に上長官に對して、

さらば、茲に永き訣を告げん。小栗大佐中野中佐

よ。呼吸は既に非常に困難なり。今は最期なり。

と筆を投じて從容として死に就けり。其の壯烈鬼

神をして泣かしむるに足る。嗚呼大尉の如きは實

に日本武士の典型、大和魂の權化なりといふべし。

一五 空中飛行器

脚なくして千里を走る汽車、權なくして大海を横ぎ

る汽船はあまりに事ふりたり。今は翼なくして空

中を飛行する術さへ工夫せられて、まさに空想なら

ざらんとす。人智の進歩驚くべきにあらずや。

されど空飛ぶ鳥を見てわが身の自由ならぬを憾む

るは自然の人情なり。空中飛行の工夫には蓋し久

しき以前より人類の苦心を費したるならん。その



昔バベルの高塔も天に昇らんの望より起りしなり。  
墨子の飛鳶、韓信の紙鳶なども飛行器の卵なりけん  
かし。

飛行器を大別して三種とす。その一は輕氣球また  
約して氣球といふ。俗にいふ風船なり。その二は  
自動氣球にして即ち空中船なり。或は飛行船とも  
いふ。その三は飛行機なり。  
氣球はその初め煙又は熱せる空氣をみて、之を揚  
げたりしが、一七七六年水素瓦斯を發見して之に應  
用してより大いに進歩し、一七八五年には英國のド

象象

ーヴァーより西北の順風に乗じ、二時半にて佛國カ  
レーに到着するを得たり。これより氣球は軍事上  
の偵察通信と氣象觀測とに利用せられたり。殊に  
一八七〇年普佛戰爭に際しては、重圍の中にある巴  
里より七十三箇の郵便氣球を放ちたるが、返信は氣  
球に添へて遣はせる傳書鳩によりて首尾よく城内  
に致されたりとぞ。氣球に駕して最も高く昇れる  
は千九百一年七月獨人パーソンが高さ三萬五千四  
百呎に達せるを第一とす。かく高く昇るときは空  
氣中の酸素乏しくなるを以て、人造の酸素槽を携帯

呎一尺


候一候

するを要す。氣象觀測の爲、白耳義の或測候所にて揚げたるものは九萬五千餘呎即ち七里餘に上れりといふ。勿論これには人は乗らざりしなり。

抗一坑

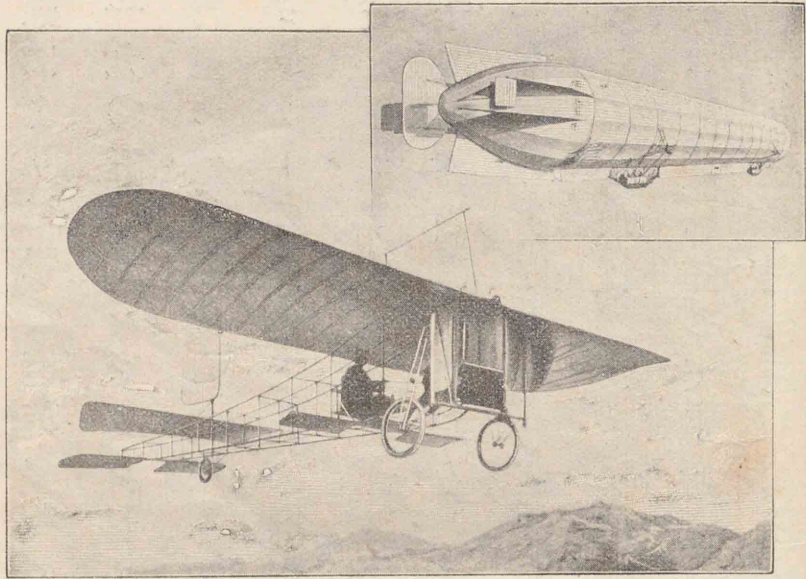
氣球は縦に上昇するには適すれども、横に航行すること能はず。こゝに於て空中船の工夫起れり。空中船は空氣の抵抗を少なくせんがために、全體を船舶又は葉卷煙草などの形として推進器を用ひ、さながら海の水を押分けて進むが如く、空氣を押分けて前に進むべく、作れるものなり。空中船に必要なるは最も輕き瓦斯と最も輕くして強き構造材料とを

舵一棍

得ることなり。この工夫も亦佛國に起り、一九〇一年、サントデュモンは巴里にてエッフェル塔を一周したり。方今空中船にて最も有名なるはツェッペリン伯なり。伯は空氣の抵抗を避けんがために十七箇の氣球をあつめて長き圓筒形の空中船を作り、これに鰭と舵とをつけて上下左右の運動を自在ならしめたり。獨逸政府は大いに之を保護して専らその研究を助く。鳥や蝶やその體重は何れも空氣より重きにかゝはらず、なほ空中を飛びゆくは何ぞや。羽翼ありて運

旋施

動すればなり。されば人もその體重に相當する羽翼を具へなば、飛行の術も得られぬことはあらじ。これ飛行機を發明するに至れる所以なり。昔希臘の或哲學者は木にて一種の翼を作り、みづからこれを動かして空中に飛べりといふ。また玩具の「蜻蜓」の理を應用し、螺旋の運動によりて上昇することを考へたる者あり。されど現今尤も有望なるは平面式飛行機なり。これは鳶鷹などの如き空高く舞ふ鳥は雀鳩などの如く屢羽ばたきすることなく悠然として翱翔しをるより思ひつきたるものなり。か



機行飛び及船中空

くて一方には鳶鷹は勿論飛魚、栗鼠、蝙蝠、蛙その他諸種の飛行動物につきて飛行の理論を研究し、一方には之に擬して機械を工夫し、翼と舵と推進機と發動機とによりて各種の飛行機を作れり。而してその翼の

數によりて單葉複葉多葉の別を生ぜり。  
 一九〇五年サンフランシスコにて試みたる單葉飛行機の飛揚は頗る喝采を博したりき。これはモンゴマリー教授の工夫に出でたるものにて、マロニーといへる名人これに乗りき。初は氣球の力にて四千呎の高さに上りたるとき、マロニーは繋ぎたる綱を自ら切り放ちたれば、氣球は離れて天高く沖り、マロニーは飛行機によりて空中旅行を始めたり。マロニー手に隨つて飛行機の翼を操縦すれば、飛行機は右に往き左に返り、或は圓く或は螺旋狀に、或は風

沖  
沖

往  
往

沖  
天  
勢

に順ひ或は風に逆ひ、千變萬化の祕術を盡して縱横自在に空中をかけめぐり、二十分間に八哩を飛行してやすく、と豫定の地點に降下したりといふ。その後マロニーは試験中、飛行機の故障のために命を隕したれども、モンゴマリー型の飛行機は斯界に一紀元を劃するに至れりといふ。現今にては推進機によりて必ず若干距離の地上を滑走し、然る後飛行するを常とす。  
 方今空中飛行の術は研究の最中にあり、前途果して如何なる發達をなすべきか、豫め知るべからず。さ

推堆推

れど往を以て來を推すに、遠からず軍事上に利用せられて空中船を空中戰艦巡空艦とし、飛行機を空中水雷艇とせる空中艦隊の編成を見るに至るやも知るべからず。又現に之を交通上に應用して空中船飛行會社の設立を企つる者あり、或は之を極地の探檢に適用せんと試むる者あり。亦快ならずや。

一六 須磨

新保 磐次

須順

攝津の海岸盡くる處を須磨の浦といふ。畿内の咽喉にして、古須磨の關のありし地なり。相傳ふ、在原

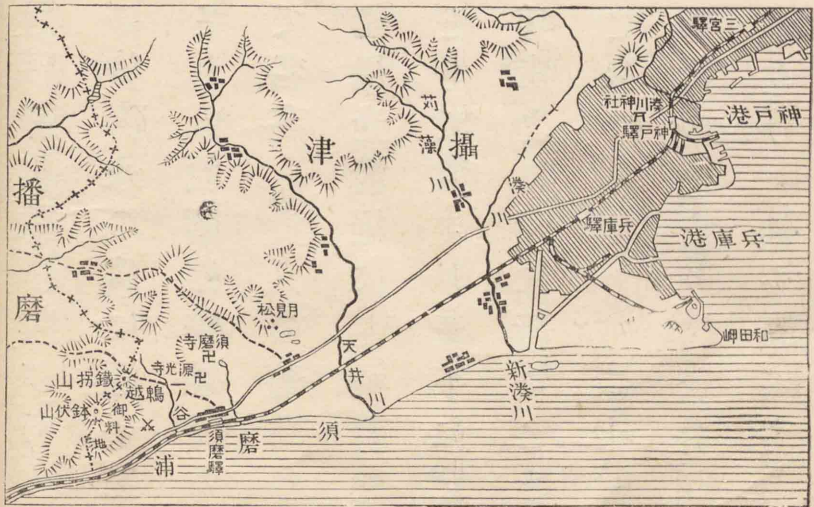
救勅

僻癖

行平卿救勅を蒙りて久しくこの土に住せりと。その後、壽永の亂に源平二家大いにこゝに戰へり。されば須磨は僻地なるにもかゝらず、關の跡を以て名高く、貴人の舊跡を以て名高し。しかのみならず、風光清絶にして、月色ことに佳きを以て、月の名所として古より天下に聞えたり。

兵庫より西に行くこと一里餘にして天井川あり。これより西の方二十餘町、攝播の界に至るまでは須磨村の地なり。天井川より數町にして、路傍に用水池あり。池を隔てたる丘の上の老松は行平の月見

寶寶寶



須磨附近地圖

の松と名づけられたり。更に行くこと數町にして、須磨寺あり。こゝに、平敦盛の首塚と云ふがあり。又敦盛の遺物と稱する寶物數多を藏して、參詣の人に觀す。須磨寺の鄰なる源光寺は俗に光源氏の舊跡なりと云へり。こゝに芭蕉の句をゑりつけたる

碑あり。

見渡せば、眺むれば、見れば、須磨の秋。

源光寺を過ぐれば、こゝは古の關屋の址にして、石の榜示あり。前の小流を路守川といふ。此の邊、源平の戰に關せる古蹟と稱ふるもの頗る多し。

又西すれば、山陽鐵道の停車場あり。これを過ぎて數町にして、一の谷を渡る。昔は平氏が第一の要害と頼みけんも、今は沙崩れ、谷淺せて、僅に一條の溝を殘し、こゝに數尺の石橋を架せり。

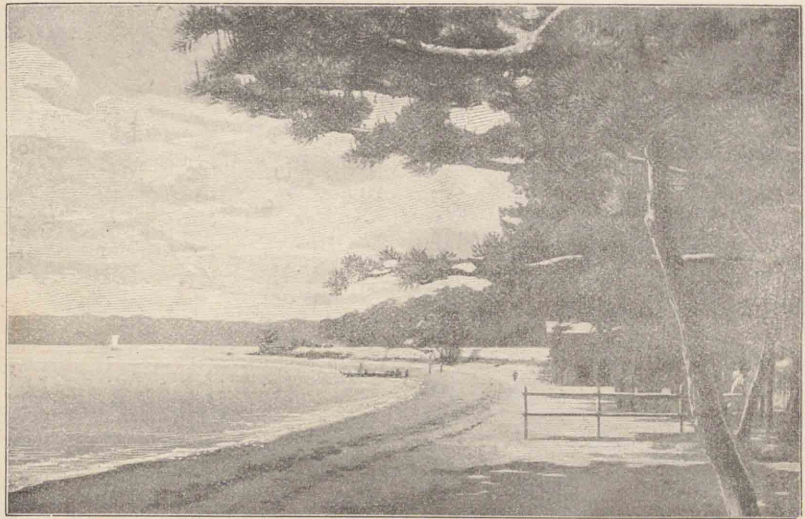
一の谷より國界に至るまで十餘町の間は、鐵拐鉢伏

邊

e

o

料科



兩山の麓にして、山頂より  
 路傍に到るまで一面の松  
 林なり。是、即ち須磨御料  
 地なり。この處より眺む  
 れば、前は蒼海渺茫として、  
 遙かに紀泉の山を繞らし、  
 左は天井川の沙洲斗出し  
 て、粉壁樹林の中に點じ、右  
 は淡路島の漁家呼べば應  
 へんとす。顧みて鐵拐鉢

況況

伏を望めば、御料林の老松、山上に連なり、龍蟠り、虎踞  
 る。四面の絶景、恰もパノラマを見るが如し。況や  
 明月中天に懸り、海波銀を磨する時に於てをや。須  
 磨の須磨たる所は實に此の十餘町の間にありとい  
 ふべし。

須磨は風景の佳なるのみならず、醫家の説に據れば、  
 空氣清潔、氣候溫和にして、人の養生に宜しきこと亦  
 海内に冠たりといふ。近來、衛生の學漸く進み、土地  
 の效力を信ずることも漸く深くなりたるに隨ひて、  
 須磨に轉地保養するもの日に多きを加ふ。こゝを

效効

沙<sub>二</sub>砂

以て、旅店・別荘、青松・白沙の間に相望み、凡そ地の買ふべく、借るべきもの殆ど餘す所なく、十年前の漁村變じて雑沓の街とならんとせり。獨り一帯の御料林は固より金力の侵すべきに非ず、民これを得ざるが如くして、永くこれを失ふことなし。富人も往き、貧生も遊ぶ。風景依稀として古の須磨なるは、亦吾が皇室の餘光にあらずや。(國語讀本)

一七 須磨・明石

今様歌 七五 四句

松風清き夕波に

跡<sub>一</sub>蹟

月もよせ來る須磨の浦。

關屋は跡ものこらねど、

人の心やとまるらん。

波間にしづく秋の夜の

月の光のあかし瀉。

昔はその白珠を

あまの男狭磯やかづきけん。(小學唱歌)

允恭天皇の  
頃の淡路の  
海人。

一八 知己

所知(屋)信友

坪内逍遙



宣—宜

郷—卿

ギリシヤの學者ピシヤス、時の暴君ダイオニシヤスの怒に觸れて、罪なくして死刑の宣告を受け、るが、一たび故郷に歸りて家族に訣別せんことを願ひけり。王冷笑ひて、「一たび放たれしものが、わざく殺されに歸る筈なし。偽りて逃げんとするならん。」とて許さざりしを、不安心に思召すならば、歸るまでの身代りに、「とて、親友デーモンといふを差出しければ、日數を限りて歸郷を許されけり。かくて、その日限もきるゝばかりになりしかど、ピシヤスより何の便りもなし。さては逃げしならんと

妨—防

いふ噂高くなりけれど、身代りのデーモンばかりは、獄中にありて少しも不安心の氣色なく、必ずその日までには歸り來るべしといひゐたりけり。いよくその日は來りぬ。ピシヤスが約束に背きし上は、身代りなればとて、罪なきデーモンは引出され、斷頭臺の下に据ゑられたり。されどもデーモンはわるびれたる様子もなく、おちつきていひけるやう、「親友ピシヤスは決して約束を破るやうなる男にあらず。歸り來らざるは何事か思はぬ妨の生じたるならん。」かくいひつゝ、徐かに頭をさしのべて、刃

動作  
郷食庭

を受けんとしたりける時、ピシヤスは驅けつけ來り刑場に走り入りて、途中大風にあひて船の進まざりし爲に、時日の後れたりし由を語り、速かに死刑に處せられたしと願ひ出でけり。

さすが暴君のダイオニシヤスも、二人のふるまひに感じ入り、「これぞ眞の友なる。あゝわれもかゝる友こそほしけれ。」とたゞへつゝ、遂に二人ともに赦して還らしめけり。  
(新國語讀本)

一九 ピラミッド

余は丘を上りて、大ピラミッドの前に立てり。こは五千年の昔、エジプト國王の建てたるものにして、高さ四百五十呎、三角底の一邊各七百四十六呎ありといふ。されど四邊茫漠たるが故に、さまで大なりとは見えぬ。五千年の風雨にさらされて、稜は稍つぶれ、三角なる面は處々缺け損じたり。このピラミッドより少し小さきが一基、更に小さきが一基、他に王族・重臣の墓といひ傳ふる、いと小さきもの數基あり。案内者の勸むるまゝに駱駝の背に揺られて、大ピラミッドを一周し、駱駝を下りて、ピラミッドより、なほ

勸勤

頂—項—頃

古しといはるゝスフィンクスのもとに到り、暫くこれと相對しぬ。自然の巖を刻みて成せる人の顔、獅子の體、相つらなりて永久に砂上に匍匐せり。嘗て射的の的にせられて鼻のあたり缺け損じたれど、なほ昔の面目を存し、身長百四十六呎、高さ五十六呎、顔は頂より顎まで二十八呎半ありといへど、これも四邊の茫漠たる爲に、さまで大なりとも思はれず。默然としてしばらく相對すれば、石像は次第に微笑を帯び來るが如し。

砂に埋るゝその足下にいたり、更にその肩に攀ぢ、轉

掘—堀

象—象

じて、發掘せられたる墓穴の長さ一丈、厚さ四尺もあるべきが、赤花崗石もて、堅固に築かれたるを見たり。烈々たる日光の中に立ちて、四顧すれば、スフィンクスは此方において熱砂の中に横たはり、ピラミッドは彼處にあたりて深青の空に聳え、青天白日物象皆明らか、餘り明らか、餘り靜かにして卻つて無きが如し。暫くして我にかへりし余はピラミッドにのぼらんとて、案内者を先にたてゝ行きぬ。

やがて、案内者の一人は余の右手をとり、一人は左手をとり、一人は腰を押し、大ピラミッドの東南の角よ

超越

り登り始めしが、積み上げたる石は皆堅緻なる石灰石にして、高さ三尺に超ゆるものあり。手を執られて跳つて登るに、足がかりは十分なり。半途に小憩して、漸く絶頂に到る。この間、二十分を費しぬ。ああ、ピラミッドは實に大なり。人の手もて造りし墓の中にて、かほどまでに大なるはあらざるべし。絶頂は約百坪の平面なり。額の汗を拭ひ石に踞して眺むれば、東はニール河昔ながらに汪汪として流れ、その兩岸は麥黄に野菜青く、櫻欄をここに、に簇生せり。カイロ市は河の彼岸にありて、モカタム丘の

櫻欄

端一瑞

下に白く、綠樹道を挟みて一線我が脚下よりそこに達せり。西はリビアの沙漠、波濤とうねる丘の末遠くサハラに亘れり。今わが立つピラミッドを中心とせる沙漠の端一帯は、古今に比なき大墓地にして、附近幾箇のピラミッドを始め、眼の及ぶ所、遠く墓石の羣をなせり。この頂上には、旅人さまざまにおのが姓名を刻めるを見たり。余も小刀もてはかなきわが名をピラミッドの上に留めぬ。

(巡禮紀行に據る) 作者 徳富蘇峰

二〇 螢の話

渡瀬庄三郎

夏の夕方、川邊に立つて螢を見る。八時頃から段々多く出て来て、十一時頃には最も盛になるのであるが、この時分になると、螢狩の人たちは、もはや家に歸つて見えない。

呼ぶ聲は絶えて螢のさかりかな。 大草

螢

螢は始終光つて居るものではない。今まで樹に止つて居たかと思ふと、急に飛び始めて、十分間ほど飛びまはる。するとまた樹に止つて、光も淡くなるが、十分間ほどたつと、また飛び始める。午前一時二時となると、皆樹の葉に靜かに止つてしまひ、光もごく

四一疋

弱くなつて、僅に認められる位になり、そのあたりは殆ど眞の闇となる。けれども、此の時もし一匹の螢が光を放ちながら、他から飛んで來ると、今まで光を止めて居た多くの螢がこれに應じてまた一時に光を放つて、長くは續かぬがその當座は、再び近邊があるかくなるものである。これは一匹の螢が光り出すと、他のものが皆負けん氣になつて競争をするのかと思はれる。そのくせ、螢は他の物の光をば至つて嫌ふのである。これは、

吸—吹

明りから暗がりへ入る螢かな。 東工  
 とある如くである。それで太陽の輝いて居る中は  
 勿論、夜でも月のある時、殊に満月のをりなどには、じ  
 いつとしてゐて、飛びあるかない。たゞ樹にとまつ  
 て、淡い光を出してゐるばかりである。しかし、また  
 暗夜に小さな光などが見えると、必ずその方へ飛ん  
 てくる。例へば螢を瓶に入れて振つて見せると、そ  
 こへ飛んで来る。これは螢であるから、さもあるべ  
 き筈であるが、螢火には限らぬ。煙草を吸ひながら  
 河の畔に居ると、やはり其處へ飛んで来る。尤もこ

卷—券

れは螢のみが間違へるのではない。或時、螢狩に出  
 掛けたところが、大きな少し色の違つた光つて居る  
 ものが来るので、これは定めて新しい種類の螢ごぎ  
 んなれとて、身構へをなし、あはや蟲捕網を被せよう  
 としたら、螢ではなくて、大の男が巻煙草をくゆらし  
 ながらやつて來たのであつた。同類の光を目當に  
 飛び廻る螢ですら間違へるのだから、我々人間のま  
 ちがへるのは無理もない。  
 それで、多くの螢は夜間の演劇をすまして、夜明に近  
 づくのだんく、地に近い方へ降りて來て、

螢火や草にをさまる夜明かな。  
となるのである。(螢の話)

二一 自然の音楽

坪内逍遙

聲の調子に一定の高低ありて、節面白く鳴り響くを音楽といふ。琴・笛・三味線・ピアノ・オルガン・唱歌などの音曲は、通例謂ふ所の音楽なり。されど、かゝる人為の音楽の外に、自然の音楽とも謂ふべきものあり。鶯・雲雀・松蟲の聲などは是なり。其の他、心を留めて萬物の聲を聽けば、松風にも水の聲にも自然に美しき

聽聞

しらべはあるなり。

鶏も歌ひ、鳥も鳴く。雀・雲雀・山がらなど、百鳥の聲皆音楽なり。鶯の高き空に歌ひ、鳩の低き梢に鳴く、これもまた音楽なり。或鳥の音は笛の如く、或者は琴の如く、或者は胡弓の如し。

ひぐらしの聲に夕日沈めば、松蟲・鈴蟲・機織こほろぎなど鳴き出づ。或は金の板を叩くが如く、或は銀の鈴を振るが如し。蛙・蟬・蜂など皆それぐに樂を奏す。草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も各その音色を異にす。或は琴の如く、或は笙の如く、

涌二湧

鼓二鼓

明治三十七年七月。

或は箏策の如し。

水の音楽は更に面白し。泉の水の涌き出づる音は、  
琴尺八ピアノの曲とも聞くべく、落葉をくゞる細き  
流の聲は琵琶月琴の調にも似たり。軒の雨垂を豆  
太鼓の音に喩ふれば、瀑布のどろくと落つるは、大  
太鼓の響にも喩ふべし。かの大海の波の音の物す  
ごく勇ましきに至りては、喩へんに物なし。(國語讀本)

二二 太白山の激戦

明くれば二十七日、旅團長より次の命令が下つた。

壁  
石  
見

決二決

前日来ノ將卒ノ勇敢ナル動作ヲ嘆賞ス。旅團ハ  
本日午後五時ヨリ太白山東方一帯ノ敵ヲ攻撃ス  
ル爲全砲兵ヲ以テ砲撃ヲ加ヘ、左翼隊ハ砲撃ノ熟  
スルヲ待ツテ前進シ、敵ヲ攻略セントス。其ノ聯  
隊ハ此ノ好機ヲ逸セズ、死力ヲ竭シテ當面ノ敵陣  
ヲ占領スベシ。

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊ヤに砲門を開き、  
歩兵も亦全力を擧つて射撃を始めた。天地は忽ち  
硝煙に鎖ツされた。飛彈の響は山谷を劈ツかんばかり。  
今度こそは決戦であつたから、其の激しさは形容の



場二場

語がない。我が歩兵は撃つては進み、止つては撃ち、奮進又奮進、されど曇と落ち来る敵弾は眞向きに前進するのを沮む。「小隊長殿」と微かに響くは最後の感謝。あつと叫ぶは三寸息絶ゆる聲。さりながら今は戦友の死を顧みるべき場合でない、一步でも前進して敵陣に迫らねばならぬ。「旅團長閣下の命令には死力を竭せとあつたではないか。たゞ進め。進んで死せよ。今は半歩も止るべき時でないぞ」と、將校は軍刀を揮つて、戦線を彼方に走り此方に驅けて士氣を鼓舞してゐた。豫備隊たりし二箇小隊も

劍二劍

工兵も亦第一線へ増遣せられた。遂に我が第一大隊は敵前實に二十米突の近くまで肉薄した。されども、前に立ち塞がつて居るのは屏風の如き岩山で、殆ど一つの足場も無ければ、如何にあせつても攀ぢ登ることが出来ず、側面からは敵弾がばらばら飛んで来る。正面に向つた第二中隊は唯敵の機關砲の標的となるばかりで、見るくうちにはたくと仆れる。一弾は松丸大尉の劍身を貫いて左眼を掠めた。而して又我が砲兵の射撃は花火のやうに空中で破裂したゞけのことで、敵の防禦工事に對しては、

派脈

一つの效力をも奏さなかつたらしい。「榴霰弾では役に立たぬ、榴弾を爆發せしめて、敵壘の掩蓋を碎破しなければならぬ。これが爲には我が歩兵が損害を受けても致し方が無いから、とにかく早く榴弾を發射してくれ。」と、砲兵隊へ切りに傳令を派遣したが、一人として歸つて來るものはない、皆途中で僵れてしまつた。工兵の小隊長に「爆薬を送つて來い。」と命じたが、それも間に合はなかつた。

七時も過ぎ、八時九時ともなつたけれど、形勢は依然として發展せぬ。かれこれする中に、夜は已に更け

弦絃

た。物凄き下弦の月は淡く戰場を照して、陣地の半面を朧に露して居た。この時、左翼隊なる第二大隊長内野少佐より聯隊長にあて、左の意味の通報が來た。

滅滅

我が大隊ハ今ヨリ全滅ヲ期シテ突撃ニ移ラントス。貴官モ共ニ攻勢ニ轉ゼラレンコトヲ希望ス。予ハコ、ニ謹ンデ告別ノ敬意ヲ表ス。

折しもあれや、遙かに左翼の方に當つて、嘯唳たる君が代の喇叭が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘韻微かに長く曳いて、予等の腦裏に一しほ深く泌み渡つた。

感一惑

「君が代」の喇叭の聲は恰も陛下御身親ら「前へ」と號令せらるゝかの如くに感じられて、將卒は勇氣百倍、乍ち奮躍して彈雨を犯し巖石を攀ぢて猛進し、大喊聲を放ちつゝ、敵壘に突入した。眞黒に固まつた一團の先頭に立つたる松村少佐は聲を怒らして、

「突き込め、突き込め。」

「君が代」の喇叭はなほ盛に起る、各隊は續いて萬歲萬歲の聲に天地を轟かして聲援を與へた。山上には劔尖相撃つて火花を散らし、接戦格闘、これぞ大和男兒の最後の肉彈なるぞ。傲慢無禮の此の仇、今ぞ思

援一援

翻一翻

ひ知れや」と打ち込む太刀筋に血を流す伏屍の數知れず。慘といへば慘の極であるが、窮苦の餘り始めて敵を破つたる我等が愉快は如何ばかり。海嘯の如き一團の後からは又一團と、我は續々兵力を増加するので、敵は遂に此の猛烈なる攻撃に堪ふること能はず、時は七月二十八日午前八時、東天紅を染め出したる頃、我が軍は確實に太白山一帯の高地を占領した。軍旗はひらくと陣頭に翻り、萬歲の聲は潮の如くに涌いた。(肉彈に據る)

二三 花は櫻木

花は櫻木、人は武士。

落武者、薄の穂におづ。

せいては事を仕損ずる。

鷹は死すとも穂はつまず。

わが身をつんで人の痛さを知れ。

二四 夏の興

一

徳富蘆花

紅葉 肥後国豊前郡水原村

梅

十二歳の夏、京都の梅尾寺に避暑したることあり。

寺の下に一道の清流あり。一處、藍を湛へて淵をな

し、淵の上に巖ありて突き出でたり。

日ざかりに二三の友と近くの村に行きて西瓜を買

ひ來り、之を清流にひやすと稱して、或は巖上より抱

いて躍り、或は争ひ奪はんとして、互に水を潑ねて狂

ひ廻れば、淵は雪を沸かして、三人が眼の眩める間に、

綠玉塊はいつしか水に奪ひ去られて、浮きぬ沈みぬ

流れ行く。餘りに争ひて巖角に西瓜を割れば、各其

の一分を泳ぎながらに食ふ。過半はこれ水なりき。

争争

寺僧等、我等を小河童連といへり。眞に河の童なりき。

二

河立里

故郷の姉の家に清冷冰の如き井水あり。井戸の傍に緑葉翠蔓一面に這ひ廣がりて黄花處々に咲ける南瓜畑あり。午後二時蟬の聲耳に喧しくして、一千斤の重みある時、徒跣になりて井戸側に走り行き、一桶の水を汲みて井桁の上に置き、南瓜の蔓の彎曲せるものを取り、桶にさして導水管となし、赤裸々となりて頭をひやしたることありき。其の心地今に

桶 涌

瓜  
瓜

忘れず。(自然と人生)

二五 游泳場より友に

先日は豫て御話ありし富士登山を高根君と共に御決行なされ候由定めて御愉快なりし事と御察申候當地游泳場は御承知の通り去二十一日開始例年よりも先生方の御出も多し一回意氣込居候毎月初二時間ほどは自修黙讀の対るにて専ら第一學期の後習をつと免居候れば休暇中にも遊惰に流

游 遊



俳諧連歌

老調

数首

新調

七五調

数首

終夜

埋理

動き轟き夜もすがら

大浪小浪寄せ返る。

いづこに打たぬ浪を見ん。

いつ浪の音を聞かざらん。

大いなるかな大海原

世界の山々ことごとく

崩すとも海は埋るまじ。

世界の川々絶間なく

注げども海はとこしへに

不増不減の瑠璃の色。

ドコニウタナク浪ヲ見マ  
カミヤセシ

ドコモ浪ガラテ居ル

イツカハナモノオトクモ  
コトガアヤシカ、イツテモ  
崩レク

(音)

閑閑

長閑けき様は海にあり。

風なぎはてし春の沖に、

朧にうつる月見れば、

あらぶる心もなぎぬべし。

松島かげの朝ぼらけ、

蓬萊山もよそならず。

凄じさはた海にあり。

春秋二季の大あれに、

はやて起つて浪立てば、

甲鐵艦も木の葉と漂ひ、

ツカソムク、シテ  
居ん心待モ、オケツ

影色ノ良所

船風

アキラタキナ軍ナテ

季季季

涸  
枯

大高潮の逆巻けば、  
村々流れて跡もなし。

山は崩れ、川は涸れ、

國興亡し、人變り、

陸には古今の別あれど、

海原のみは開闢の、

神代のすがたそのまゝに、

動き、轟き、寄せ返る。(國語讀本)

二七 フレデリキ大王と新兵

\*  
フロシア王。  
五十一、五六。

\*  
フレデリキ大王は常々近衛の軍隊に心をつけられ、その隊の兵士を一人々に知つて居られる位であつた。新しい顔の兵が見えるたびに、いつも三箇條の極つた質問を極つた順序に發せられた。それは、その方は何歳に相成る。

兵役に就いてから何年に相成る。

給料も品物もきちんくと受取つて居るか。

といふのであつた。

或時年若のフランス人が近衛隊に編入されたが、この男はドイツ語を少しも知らなかつたのである。

衛  
衛



檢—驗

同隊の者どもが氣の毒に思つて、「若し大王から御尋を受けたら、かうく答へるがよい。」と、その詞も順も次の通りに教へて置いた。

陛下、私は二十一歳に相成ります。

陛下、六箇月に相成ります。

陛下、兩方ともたしかに。

五六日たつて、大王親しく近衛隊を檢閱せられたを、りに、かの新兵が目にとまつたので、例の通り御尋があつたが、この度に限つてどうした事やら順がかはつて、第二の間から始められた。

陛—階

大王兵役に就いてから何年に相成る。

新兵陛下、私は二十一歳に相成ります。



王大キリアレフ

大王はびつくりせられたが、そのまゝ次の間に移つて、その方は何歳に相成る。

新兵陛下、六箇月に相成

ります。

大王愈、愕いて、

敬馬ケイバ号ガク

朕の考へるところでは、その方が朕かどちらかい  
阿呆でなりてはならぬぞ。

新兵陛下、兩方ともたしかに。

張帳眼

大王眼を見張つて、

部下の兵に阿呆といはれたのは今日が始めてぢ  
やぞ。して、どういふわけて朕が阿呆ぢや。

新兵は大王の氣色のたゞならぬさまを見て、ドイツ  
語は一言もわからぬ趣を自分の國の言葉で述べた。  
大王は苦笑しながら、

その儀ならば今日の處は仔細ない。しかし成る

べく早くドイツ語を覚えよ。おつつけ良い兵士  
になるぢやらう。(西洋笑府に據る)

二八 幼時の二宮尊徳 その一

幸田露伴

徒徒

徒らに起き、徒らに眠り、空しく食ひ、空しく衣て、何事  
もなすなきは禽獸に餘り遠からぬ人なれば、尊ぶに  
足らずといふべし。學んで知を蓄へたる人は尊ぶ  
べし、勤めて業を成せる人は又尊ぶべし、志して道を  
求むる人は愈尊ぶべし、誠ありて徳を施せる人は最

\*今は櫻井村の内。

草艸

も尊ぶべし。二宮尊徳翁の如きは實にその一人にて、君子とも偉人とも崇め稱ふべき人なりけり。  
 翁、通稱は金次郎、天明七年七月二十三日、相模國足柄上郡柏山村といへる片田舎に生れたり。家貧しきが上に酒匂川の洪水、翁が五歳の時一畝も残さずその田圃を荒しければ、これより愈、貧しさを重ねて、翁をはじめ、弟三郎右衛門及び其の後に生れたる富次郎等を育つることだに易からぬ程なりき。その中にも翁は漸く長じければ、草鞋を作りてそれを賣り、酒を求めて夜毎に父に進めけり。

縁縁



(社徳報江遠) 徳尊宮二

十四の年、翁、頼としたる父に別れて、貧苦はいや増しぬ。母は是非なく、汝と三郎右衛門とはいかにしても養ひ得べけれど、末子までは力及ばず。せん方をければ縁者のもとに預くべし。とて、心強くも富次郎を他處に預けたりけるが、恩愛に引かされて夜ごとに眠りもせざ

紛粉

る様子なり。翁これを見て、何故に毎夜やすく〜と寐ねたまはざるか。」と問へば、母は「乳の張る故に。」と言ひ紛らしてよそを向き、涙隠して悟られじとするを、翁は早くもそれと察して、涙にうるむ眼をしぼだたきつゝ、何程貧に迫ればとて赤子一人の養はれぬこととはあらじ。夜さへろく〜およりなされざる母様の悲みをいかでよそには見奉らん。小腕ながらも明日より山に薪こりて弟を養ふほどのことは致し申すべければ、早く弟をとり返したまへ。」といへば、母は大いに悦びて、夜の更けたるを厭はず直ちに鄰

更吏

富富

村に到りて事の仔細を語り、富次郎を抱き取りて立ち歸りぬ。これよりは、いふせきあばらやの中にも親子四人恙なく打揃ひて顔見合すを樂しめり。翁は朝まだきより山に入りて薪をとり、夜は更くるまで繩をなひ草鞋を作りて、ひたすら母のため弟のためと一寸の日影も惜みて立ち働きけり。翁又人と生れて聖賢の道も知らずに過ぎなんは口惜しきことの限りなりとて、僅に得たる大學の書物を離さず懐にして、薪こる山路の往き歸りに歩みながら讀みふけりたりき。(露伴叢書)

二九 幼時の二宮尊徳 その二

幸田 露伴

十六の年には、母さへ疾に罹りて三人の子を残したるまゝ、身まかりけり。翁は何一つなきあばらやの中に、まだ幼き二人の弟をかき抱きて歎き悲しむばかりなりき。さすがに親類のものもこの様を見かねて互に協議を凝らしたる末、仲と季との二人は川窪某引き取り、翁は一人萬兵衛といふ縁者のもとに養はるゝことゝなりぬ。

四能

幼一幻

動一働

然るに、この萬兵衛は元來吝嗇にて情も知らぬものなりければ、翁は終日勞動して夜々わづかに學問の道をばたどりけり。萬兵衛はなほもこれを罵つて、

温故而知新

修乃子積る本此を

二宮尊徳筆蹟  
(遠江報徳社)

を天照神の足後をん

「われ汝を養ふに多額の費用を要す。未だ力なき汝の働にて、いかでそを補ふことを得べき。」

さるにそれをも省みずして、自分勝手の夜學のためわが油を費すこと不届なり」と叱りこらしければ、翁は無理とは知れど強ひて争ふことをなさず。「さり

とて、一生文盲の人とならんも残念なり。わが自力にて學問せばまさかに叱りもせざるべし。」と思ひければ、河畔の荒地に菜を播きて七八升の實を得、燈油に代へて夜々獨り苦學しけり。無慈悲の萬兵衛又罵りて、學問せんより繩をなひてわが家事の手助けよ。」といひかけたり。翁はこれにも逆らはず、繩をひ、筵織りなど油斷なく立ち働きたる後、ひそかに燈を點じ、衣にて燈火の漏れぬやうに蔽ひかくして、ひたすらに勵み勉むるわが心をわが師となして、毎夜鶏の鳴く頃まで讀書せし辛苦のほどこそ察しやるだ

點點

植栽

になほ涙こぼるゝばかりなりけれ。このうちにも、翁がその家を興さんと思ふ心は未だ一日も撓まず、人のかまはぬ土地を耕し、人の棄てたる苗を拾ひてそこに植ゑつけり。かくてやうやう一俵餘りの收穫ありければ、大いに喜びて思ふやう、少なきを積みて多きをなすは自然の道なり。今こそ僅に一俵なれ、それを種として勤勞せば、わが家を興すこともなるべし。」とて、法を考へ力をつくして油斷なく勤めければ、遂に多くの収入を得たり。ここにおいて數年間の養育の恩を謝して萬兵衛が家

介一介

を辭し、荒れ果て、住む人もなきわが舊の家<sup>ウレ</sup>にたち、  
歸り、草を拂ひ、屋根を繕<sup>ツクリ</sup>ひ、麤衣<sup>ウレ</sup>粗食<sup>ウレ</sup>を意に介せず、た  
だ一人必死となりて家業を勵みければ、田圃も遂に  
買ひ戻して、立派とまではゆかざれども全く一家を  
興すことを得たりき。

嗚呼翁が將來大いなる事業をなしたりしも、畢竟か  
かる心がけにて事に當りたるが故なるべし。(露伴叢書)

三〇 田園日記

涼涼

九月一日。朝いと涼し。曇り勝なる空より日影を

畑 畠

りをり漏る。風なし。「今日は誠に結構な二百十  
日で」と垣越しに鄰の人挨拶す。梨畑に柵を作る。  
竹を截り索を結び、午に至りて成る。午後玉蜀黍  
を引く。夜に入りて雨。

棗 棘

二日。曇。裏山につくくぼふしの聲かしまし。  
小藪の中なる棗の實の漸く色づきたるを、悪太郎  
ども謀りて取らんとす。午後三時ごろ霽る。蜜  
蜂の巢を窺ふに、出入忙はし。茄子の畠を打ち返  
して葱畠一うねを作る。夕方西北の風。

三日。曉より雨降る。友を訪ひて薄暮に歸る。雨

KANAMURA  
Kanamura  
Kanamura

晴  
晴

餅  
餅

おは  
おは

中學國文教科書卷一

Kanamura

やむ。蟲の聲とみにさわがし。

四日。陰晴定まらず、雲に殺氣あり。この朝殊に冷  
かなるを覺ゆ。二宮尊徳傳を讀む。感奮すると  
ころ少なからず。雨驟かに降り出でてまた忽ち  
やむ。畑に出てて草を抜き、葦を移し植う。一株  
毎に白き花咲きたり。

寝  
寝

五日。陰曆八朔。舊例により餅搗きて祝ふ。小雨  
しとくと降る。晝過ぎやうくと霽れたれば松  
原に散歩す。

六日。終日雨。畑のものも庭のものも皆腐り果つ

るこちす。風なし。

喪  
喪

七日。雨尙止まず。午後友の父の喪にこもり居る  
を訪ふ。小暗き座敷に抹香のかをり満ちて、話し  
たく沈みがちなり。秋のあはれはこの一室に集  
めたりと謂ふべし。

八日。今日も雨やまず、風さへ吹き出でたり。洪水  
あるべしなど噂とりくになり。我が畑を窺けば  
葱はさながら髪を亂せるごとく、蕃椒は仆れて地  
に這ひたり。夜更けて風の音すさまじ。

九日。思の外に雨霽れんとす。折々蟬の聲漏れ聞



えて洪水の沙汰はやみぬ。六日の東京新聞未だ届かず。都の秋はいかならん。夜は五日月芋の葉にさやかなり。

已一已一已  
獲一獲

十日。一天晴れ渡りて秋高く風穩かなり。野川に釣せんとて家を出づ。稻花已に散りて萬頃の穂波を打寄せたり。「この調子なら、今年は豊年だ」など道行く人の語り行くもめでたし。夕方、鮒少し獲て歸る。(ほととぎすに據る)

三一 門出

長谷川四迷

盃一盃一杯

泣一鳴

愈、出發の當日となつた。待ちに待つた其の日ではあるけれど、今となつてはどうやら一日位は延しても好いやうな心持になつてゐる中に、支度はずんずん出来て、さて改つて父母と別れの盃の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて、ついほろりとした。母は固より泣いた、快活な父すら、めでたい、めでたいと言ひながら、頻りに咳をして涙をかんで居た。

逃への車が来る。性急の父がまづあわて出して、座敷中をうろくしながら、それ風呂敷包を忘れるな。

俾車

行李は好いか。小さい方だぞ。蝙蝠傘は己が持つてやる。」と固より見送つてくれる筈なので、自分も一臺の俾に乗りながら、何はのつたか、何は……それ、何よ……。「とあせる程なほ思ひ出せないで、何やら分らぬ手眞似をして、獨り無上に車上で騒ぐ。母も門口まで送つた。愈俾が出ようとす時、無量の思を籠めた眼にじつと私の面を視て、「ぢや、お前ねえ、體を……。」とまでは言ひ得たが、後が言へないで涙になつた。

私はわざと附元氣な高聲で、「御機嫌よう。」と一禮する

儘俾

と、俾が出たから、其の儘正面になつてしまつたが、何だか後髪を引かれるやうで、俾が横町を出離れる時、一寸後ろを振り向いて見たら、母はまだ門前に悄然と立つて居た。

往住注

道々もわざと平氣な顔をして、往來を眺めながら、勉めて心を紛らして居る中に、馴染の町を幾つも過ぎて、俾が停車場へ著いた。まだ發車には餘程間があるのに、もう場内は一杯の人で、騒がしいので、父が又あわて出す。親しい友の誰彼も見送に来てくれた。其の顔を見ると、私は急に元氣づいて、例になく壯に

笛—苗

しやべつた。何だか皆が私の舉動に注目して居るやうに思はれてならなかつた。聴<sup>ヤカ</sup>て發車の時刻になつて汽車に乗り込む。手持無沙汰な落著<sup>サツカ</sup>かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窗から首を出して挨拶をする時、汽車は動き出して、父の顔がちらりとしてすぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて、白ペンキの低い<sup>ヒカ</sup>柵が走る。其の向ふの後向きの二階家が走る、平家<sup>ヒラヤ</sup>が走る。片側町になつて、人や車が後へ走るのがをかしいと、それを見て居るうちに、眼界が忽ちからつ

郷—卿

と明るくなつて田圃<sup>ホ</sup>になつた。眼を放つて見渡すと、城下の町の一角が、屋根は黒く、壁は白く、ごたくとかたまつて見える向ふに、生れて以來十九年の間毎日仰ぎ見たお城の天守が、遙かに森の中に聳えてゐる。「あゝ家はあの下だ」と思ふ時、始めて故郷を離れることの心細さが身に染みて悄然としたが、悄然とするそばから、妙に又氣が勇む。何だか籠のやうなせゝこましい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ放されて飛んで行くやうで、何となく心臓の締<sup>ツ</sup>るやうな氣もするが、又何處かの

んびりと、急に脊丈が延びたやうな氣もする。

(二葉亭全集)

三二 亞爾泰山巔に名を題す

西村天囚

\*明治二十六年

\*九月二十四日、朝七時半、出で立つ。石徑を行き、沼澤を涉り、登ること五露里。午前十一時、亞爾泰山の絶巔なる烏蘭達巴に達す。達巴とは嶺と云はんが如し。こゝを清露二大帝國の境界と爲す。

中佐、境上に立ちて四顧するに、境界の表もなく、守疆

疆—疆

刀—刃

の人もなく、荒涼寂寞、風、樹梢に鳴り、唯大石、巨巖の落  
落として路に横たはるを見るのみ。其の孰れか露  
たり清たるを知るべからず。乃ち馬を下りて道左  
なる巨巖の上に登り、小刀を懐ホッコロに取り、巖上イハノカミに名を題  
して曰く、「大日本帝國陸軍歩兵少佐福島安正經過此  
地」と。山巔は海面より拔きんづること九千餘尺。  
身は今其の最高處に立てり。慨然として獨語して  
曰く、「汝、亞爾泰よ。地學上、汝の名天下に高しといへ  
ども、今、予汝より高きこと六尺」と。遂に巖イハを蹴キて下  
り、揚然馬に跨り、西の方遙かに露國の山河を望みて

賈一貫

「さらばよ、露西亞」と叫びつゝ、一鞭すれば、馬は既に清領蒙古の土を踏みけり。  
 抑、蒙古より西比利亞に向ふに、其の路三つあるが中に、烏蘭達巴を経るもの最も險惡にて、且宿驛もなきを以て、商賈、旅人皆道を他の二道に取り、其の烏蘭達巴に向ふ者は殆ど稀なり。されば、中佐、山中を行くこと數日の間、一人にも遇はざりけり。さらぬだに、險惡なる道は行旅往來の跡なきが爲に、益、荒れて益、惡しく、實に天下の至險なりと云ふ。  
 嗚呼、我が帝國軍人福島中佐の名は長く此の至險至

朽一柄

惡なる亞洲の一名山に留らん。よし、風霜の消磨、陵谷の變遷ありて、他日題名の石を求むる能はざるに至るとも、其の事、其の名は長く亞爾泰山と俱に存して天下の耳目に在らん。想ふに、嘖々傳稱すること久しうして衰へず、以て千古に不朽なるべし。是、豈中佐が譽のみならんや、實に我が帝國の譽なり。

(單騎遠征錄)

三三

秋分

德富蘆花

朝

三三

秋分

一三三

粟一粟

虫聲正れりかき流る

今日は秋分なり。  
早起外に出づれば、白露地に満つ。稻穂粟穂薄の花。  
蘆の花、すべて露の中にあり。蟲聲、水の如く流る。

晝

竝二並

彼岸の中日なれば、近在の老弱男女、藤澤に鎌倉に、寺詣して歸る者、織るが如し。川邊には、鯊を釣る人多く竝び立てり。

午後の日悠々として、碧潮、川に満ち、日光、空に満ち、百舌鳥の聲、耳に満つ。

夕

鴈二雁

日は入りぬ。無花果の葉蔭薄闇くなりて、芙蓉の花も漸く凋しぼまんとす。空に鴈聲あり。十五夜に影を見せざりし月は、今宵照り出でぬ。庭の眞砂、霜の置けるやうに白み、樹影黒く地に涌きぬ。白萩、月に映じて雪の如し。(自然と人生)

三四 蒔かぬ種は生えぬ

怪二恠

「蒔かぬ種は生えぬ」とは、よく人の言ふ諺なり。骨を折らざれば、成功せず。勉強せよ、労働せよといふ意味に於ては何人も疑ふものなし。然るにこゝに怪

\*  
一六六一六六

蛆シ

卵マダラ卵マダラ印マダラ

しむべきは、生物については、オシカ蒔かぬ種の生ゆる如き考を有する人の少なからぬこと是なり。昔は「うじ」は、肉などの腐れる處に自らオシカわくものと信じ居たり。然るにイタリヤのレヂ\*と云ふ學者は、實驗によりて、此の事の實否を確かめんとし、細き金網にて肉をおほひ置きしに、何日を過ぎてても、何程肉の腐りても「うじ」は一匹も生ぜざりき。かくて「うじ」は決して種のなき所へ、自然にわくものにあらず、その實蠅ハエの來りて卵を産み附くるにより、そのマダラ孵化して「うじ」になることを確かめ得たり。

若マダラ苦

敗マダラ販

或は云はん、「生物學上蒔かぬ種の生えぬ事を知り得たりとて、人間生活の上に、何の益かあらん」と。これ大いに然らず。試に見よ、近來大いに進歩したる消毒法の如きは、全く此の理を實地に應用したるものにあらずや。若し病氣の基となる微細なる生物が、種なきに自らわくものなりとせば、現時の消毒法は何の用をもなさざるべし。又かの食物の罐詰なども、物の腐敗するは、目に見えぬ小さき生物の働なれば、此の生物の種の舞ひ込まぬやうに、食物を封じ置けば、何時まで置きても腐らぬ筈なりと云ふ理由よ

掘堀

り案出せる法なり。

此の他、アサギ蒔かぬ種の生ゆる如く誤りをすることは少なからず。これ何れも観察の粗漏ロウなるためか、又は推理の精密ならざるために外ならず。例へば新に掘りたる池に、翌年よりオウゴン蜆のわきたりといひ、鰻の生れたりと云ふが如きは、屢聞く所なり。なるほど一通り考へたる處にては、此等の動物はとても乾きたる地面や又は空中を飛び行く力はなければ、山の高き處に、新しく掘りたる池などに移る筈はなし、全く其所へ自然にわきたるに相違あらじと思はるれど、更

鰻

狭一挾

によく研究すれば、鰻なりシメジ蜆なりに全く遠く隔たりたる處に行く力なしとは言ひ難きを見るべし。

鰻は、元來海中に孵化するものにて、初めは幅廣く透明にして白魚シラサギの如き形をなせど、成長するに従ひ、身體次第に縮り、幅も狭くなり、色も次第に黒くなりて、所謂「はりりなぎ」に變ず。この「はりりなぎ」は、幾千幾萬となく羣をなして河を溯り、次第に細き溝などに進み、雨降れば道路を横ぎり、草の間を這ひなどして、上へ上へと進み行くものなれば、終には山の頂に近き池にも達することを得べし。鰻の發生する模様



殻カ殻カ

貝類の殻

は、近年まで詳しくは知られざりしが、今日にてはその次第も明瞭になりて、從來海濱にて屢人の採集したる「びいどろ」を「は全く鰻の幼兒なることを確かめ得たり。  
貝類の新しき池の中に生ずるは、一層不可思議なるが如くなれど、これにも同じく外より移り来る道なきにあらず。貝類の幼兒は、二枚の殻を開閉して、鴈鳴などの羽毛ワケに附著することあれば、一方の池より他の池に、貝の種の舞マユひ込むことは、決して珍しきことにあらず。現に東京大學の某教授が銃獵にて獲

鳴ナリ鳴ナリ

たる鳴ナリの足に、大きな貝の挟み付き居たることもあり。されば、よく研究すれば、貝類の如き餘り運動せざる動物にても、遠方に速かにうつり行く手段はあるものと知るべし。従つて前年掘りたる池に、今年貝の居たればとて、直ちに「此の貝はこの池にてわきたるものなり、他より來れるにあらず」と論決するは、輕卒カハスの譏オモシロイを免マヌるべからず。  
もとより、世界は廣く、人間の知識は極めて淺きものゆゑ、何處如何なる時に於ても、種なしに生物は決して生ぜざるものなりとは斷言するを得ざれども、と

もかくも、今日までの経験によれば、蒔かぬ種は生えぬと云ふ諺は、直ちに取つて之を生物學の方面に用ひても、少しも誤あらざるなり。(簡易動物學講義に據る)

三五 スバルタ武士

昔希臘にスバルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇の譽今尙高し。而してスバルタ人の教育の方法と生活の状態とを聞くものは、此の聲譽の偶然にあらざるを知るべし。  
スバルタ人は悉く武士にして、男子生れて七歳に達

態—熊

鍊—練

すれば、國立の教育所に收容せられ、王子王族といへども、家庭に人と成るを許されず。其の教育は身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操・武術・劍舞・軍樂等にして、読み書きの如きは、餘力を以て之を學ぶに過ぎず。

枚—牧

教育所に於ける少年・青年の生活は、専ら廉潔・質素・克己・忍耐の氣象を鍛鍊するを目的とし、其の規律は頗る嚴格なるものなりき。寐ぬる時は、僅かに一枚の敷蒲團を用ふるのみ。其の蒲團は河邊の蒲の穂を集めて、自ら之を作らざるべからず。衣服は重著を

許さず。冬も尙はだしにて、靴を穿つを得ず。毎日  
 河水に浴して、温湯を用ふることなく、食物も亦極め  
 て粗悪にして、飽食することを許されず。是他日戰  
 場に出でて、飢渴に耐ふるの習性を養はんが爲なり。  
 言語は簡明を貴び、饒舌を誡む。故に今日に於ても、  
 西洋諸國にては、言語の簡單明白なるを、スバルタ人  
 の答ケレバといへり。又謙讓と從順とはスバルタ武士の  
 最も重んずる所にして、長幼オコトノの序正しく、未成年者は  
 路を行くにも、兩手をマントの下に入れ、視線を地上  
 に垂るゝを禮とし、揚々オホホ闊歩するを得ず。公民は總

息忘

べて未成年者を懲戒するの權利を有し、懲戒を受け  
 たる未成年者、若し之を其の父兄に告ぐる時は、父兄  
 は更に之を懲戒するの義務あり。』  
 二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて、公  
 民の列に入る。而も武藝の練習は終生之を怠るべ  
 からず。公式祭儀の席には、老若相合して武勇の歌  
 を誦す。老人先づ聲を上げて、我等は嘗て武勇なる  
 壯者なりきと歌へば、壯年之に次ぎて、我等こそ今は  
 それなれ。知らぬものはいざ試みよと歌ふ。少年  
 亦之に和して、我等はやがて更に武勇なる壯者たる

祖一租

べし」と結ぶ。

かくの如き尙武教育に鍛はれたるスバルタ武士は、死を見ることが歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽とせり。

こゝにスバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。

敵の軍勢山野に満ち、大小の軍旗空をおほひて、天日見えずとの報に接し、大將自若として曰く、「然らば其の陰に戦はん。」

ツマン者  
チツテ残  
モ早ルヨ  
ルガ良

敵勢雲霞の如く、其の數を知らずと言へば、一將喜んで曰く、「敵勢大なれば、我等の名譽も亦随つて大なり。」一將又曰く、「我等は敵軍の數を知るの要なし、唯其の所在を知るべきのみ。」

敵軍將に寄せ來らんとすと報ずるものあり。將軍叱して曰く、「敵、我に寄するにあらず、我、敵に寄するなり。」

スバルタ人の忠勇義烈なるは、獨り男子のみにあらず。女子も亦此の美德を分てり。一婦人其の子の出陣に際し、自ら盾を取りて之に授けて曰く、「勝ちて

乗乗

持歸れ。然らずんば之に乗りて歸れ。  
或時の戦に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり  
來りて之を告ぐれば、先づ勝敗の如何を問ふ。我が  
軍勝てりと聞きて、喜んで曰く、我が子は祖國の爲に  
之を産めり。

又或時の戦に討死したる勇士の母は、花冠を被りて  
街頭に集り、互に其の子の名譽を祝し、敵の包圍に陥  
りたる將卒の母は、固く戸を閉ぢて出でず、私に其の  
子の武運拙くして、祖國の爲に死する能はざるを悲  
しめり。(文部省、高等小學讀本)

三六 戦地より歸りて

志賀重昂

謹啓。本日滿洲丸にて無事歸著致候。扱四十  
日間の巡航は我々便乗者の見聞を廣め得たる  
こと尠からず候。無線電信の如き、その利益あ  
ることは豫て承知致居候へども、海上若しくは  
陸上より幾多の報知本船に輻湊し來り、戦地の  
出來事手に取る如く相分り候事實を見、人知れ  
ず多年此の如きじみなる事を研究せる人の我  
が海軍部内にありしことを感謝致候。又絶海

輻湊  
輻輳

の孤島コトウに若干の日本人が渡りゆきて數月間或重要なる任務に服しをる實況を見世には知られずして大切なる働をなし居るものゝ多くあるを悟り申候。

尙又小生が船中にて便乗の外國人と交際致候際、深く感じ候は、我々日本人が將來世界的發展を遂げんには、それに必要な體力と志氣とを養成すること何よりもまづ肝要なるべしと申す事に御座候。固より衛生法は堅く相守るべきことには之あり候へども、衛生法以上の事を

なし遂ぐるに非ざれば非常の場合に際し、大事を成すことは能はずと存候。青森の雪中に行軍するも凍餒せず、遼東に野營するも赤痢に冒されず、澎湖島コウモクに遠征するも虎列刺コウレツに罹らず、臺灣に轉戦するも猩紅熱を患へざる様平素心身を鍛鍊致置度存候。咽喉を護るは衛生には相違之なく候へども襟卷をせざれば直ちに感冒になり、よく睡眠するは衛生には相違之なく候へどもたまに一夜徹宵して翌日弱る様なることにては、到底世界的國民として列國の間に關

步致候事はむつかしかるべしと存候。此の一  
事は此度の旅行によりて特に小生の感じたる  
ことに候間今更めきたる申條ながら卑見申述  
候。餘は面晤を期し候。拜具。  
(大役小志)

三七 父の訓

桂 太郎

予の少年時代には、所謂武士道教育で、滅多に刀を抜  
くな。併し一旦抜いたら必ず敵を斬れ」と云ふこと  
を教へられた。これは少時父から訓へられた一旦  
かると思ひ定めたことは十分に忍耐して必ずこれ

一旦一朝

今更めく  
今新しく  
云フより本  
が、  
申條ながら之  
云に力多テ  
よが、

躊躇—猶豫

躊躇  
躊躇  
躊躇

を貫徹せよ」といふ教と一致して居る。すべて或事  
を決するまでは、いくら時間を要してもかまはぬか  
ら、十分熱心に考へる、輕卒にそれを定めはしない。  
しかし、一旦決めた以上は、何所々々までも決行し、ど  
んな障礙が起らうと、そんな事には躊躇せず、必ず仕  
遂げねば已むべきでない。決定するまでには十分に  
熟考し、十分に研究しなければならぬ。その決定  
といふことが又極めて大切で、如何に遂行しても、最  
初の計畫が悪くては、結果もまた良好な筈が無い。  
計畫無しに事をやらうなどとは以ての外的事であ

る。

此の事は單に事業の上ばかりではない、學問の上にも  
 於ても同様である。途中でどんな誘惑物が出よう  
 が、どんな困難が生じようが、じつと忍耐して遂行し  
 なければならぬ。昔から忍耐せよとは、誰も口癖の  
 やりに云ふことだが、言ふは易く、行ふは難して、見渡  
 した所、なかく之を實行し得る者は少い。決める  
 のも早い、破るのも早い。熟慮をしない、熱心がな  
 い、遂行する能力も元氣も無い。昔でいふと、つまら  
 ぬ事にすぐ刀を抜くが、抜いたかと思ふとすぐに敲

誘惑物

癖 癖地

敲

き落されると言つたやうな有様である。そんなこ  
 とでは到底満足な事業の出来る筈がない。

忍耐に伴つて自然に出て来るのは、物事を急がぬと  
 いふことである。古歌にも「武士の矢走のあたり近  
 くとも、急がばまはれ瀬田の長橋」とあり、俗にも「せい  
 ては事を仕損ずる」といふ。予は常に父の訓誡を守  
 つて、今まで決して物事を急いだことはない。予は  
 嘗て

挿入句

損 損

一日に十里の道を行くよりも、

十日に十里行くぞ樂しき。

武士の 秘訓



尤一最

といふ歌を詠んだが、これは予の主義である。予は元來仕事の早い方ではないが、其のかはり一旦やりだしたなら、決して退かないつもりである。尤も此の歌は、予の創意ではなく、予の爲に父の詠んでくれた

日本の前  
から考へ

一日に一字學べば十日には

十字になるぞ、習へ壽熊ヒヤクマ

といふのをもとにして作つたのである。壽熊といふのは、予の幼名である。(學生)

萬二万

### 三八 明治聖代の進歩

明治天皇の盛徳鴻業は萬民の共に仰ぎ奉り、列邦の共に視奉る所なり。今假にその數字の上に現れたるものゝみを挙げ、以て天皇の御遺業の如何に廣大無邊なるかを偲び奉らんとす。

即即

明治元年、天皇の即位あらせられし時に於ては、我が國の面積は約二萬四千方里に過ぎざりしに、其の後臺灣、及び樺太の南半を領有し、朝鮮を併合せるがため、今や四萬三千方里となり、殆ど二倍近くの増加を示せり。人口に至りては、明治の初年には正確なる

徴—徴

調査なかりしも、其の後の統計に徴すれば、約三千万内外なりしならんと思はるゝに、今や六千三百餘萬となり、正に二倍となれり。國庫の歳出入に至りては、明治八年までは一定の會計年度といふものあらざりしを以て、正確に之を示すこと能はざれども、一年の歳入は僅に四五千萬圓に過ぎざりしに、今や五億圓以上に達し、若しこれに臺灣朝鮮等の歳入を加ふる時は、優に六億圓を出て、實に十數倍の増加をなせり。また外國貿易の輸出額は、明治の初年には僅に二千六百萬圓に過ぎざ

延—延

りしに、明治四十四年度に於ては、内地のみにも九億六千萬圓に達し、之に朝鮮臺灣の輸出入額を加ふれば、優に十億圓を超え、殆ど四十倍に達せんとす。其の他、銀行會社の資本金の激増せるは勿論、鐵道の如きも、明治五年京濱間に二十七哩の單線を敷設したるまでは、我が國に一哩の鐵道さへもあらざりしなり。然るに、今や、南滿洲に於けるものを加ふれば、その延長殆ど七千哩に達せんとす。電信、電話、船舶等の進歩も亦之に準じて知るべし。明治聖代に於ける進歩の統計を擧ぐるに當りて、吾

據一攬

人の看過すべからざるは陸海軍の進歩是なり。明治天皇御即位の當時は、なほ封建割據の勢にて、固より新式の陸軍なく、明治十年に於てすら、軍人軍屬の總數僅に四萬に充たざりしなり。然るに、今や、現役と豫備役とを合せて數十萬の精兵を有するに至り、單に數の上より云ふも、明治十年以來十數倍の進歩をなせり。ことに海軍に至りては、其の進歩更に著しきものあり。明治初年の軍艦はいづれも木製にして、噸數も少なく、當時最も有力なる堅艦と稱せられたる東艦すら、排水量僅に一千三百餘噸にして、他

著一箸

龍一竜

に快風飛龍等、槩ね今日の驅逐艦にも及ばざる小艦の僅に三四隻ありたるに止まりき。然るに今や、五十幾萬噸百餘隻の軍艦を有し、其の大なるものに至りては實に二萬噸を超ゆ。されば海軍の進歩は明治の初年に比して數百倍に達したるものといふを妨げず。

明治天皇が内治を刷新し、憲法を制定し、或は教育を普及せしめ給ひたる無形の鴻業は姑く措き、單に數字に現れたる所にては、以上述ぶる所の如し。我が六千萬の國民はおるか、世界各國の識者が、前古無比



金井徳三